

韓国語母語話者を含む日本語日常会話における 褒めと自己卑下の連鎖 —会話分析の視点から—

Sequences of Compliments and Self-Deprecations in Japanese Mundane Conversation
with Korean Native Speakers: A Conversation Analytic Perspective

永野 美菜

要旨

本研究では、韓国語母語話者を会話参与者に含む日本語での日常会話における、褒めと自己卑下について会話分析の手法を用いて検証した。従来は、褒めや自己卑下の発話は褒めや自己卑下の発話自体と、それに対する反応についてそれぞれ研究されて来た。しかし、本研究では褒めと自己卑下の発話自体とそれに続く反応を一つの連鎖として観察した。さらに、同じ評価という発話行為であるのにも関わらず褒めと自己卑下は同時に検討される対象になることは少なかったが、本研究では褒めと自己卑下の連鎖を同時に観察することで、互いに及ぼす関係性を検証した。最後に、韓国語母語話者を会話参与者に含むことで褒めと自己卑下の連鎖にいかなる特徴が見られるか、さらに第二言語話者を含むことによりどのような連鎖上の影響が出るのかも検討した。

会話分析の手法を用いるのに当たり、本研究では韓国語母語話者を含む日常会話を録音・録画した資料を用いた。録音・録画の資料を収集する際

には、会話参与者には録音・録画実施以前にデータ使用主旨についての同意を確認した上で、研究への参加同意書に署名してもらっている。本研究での使用データは全3種類で合計170分で、会話参与者の人数に限定はなく、2人会話が1点、3人会話が2点である。また、いずれのデータにも韓国語母語話者が1名以上含まれるようにした。

次に、本研究で得られた結果を述べる。Golato (2005)は自己卑下の連鎖の後には結果として褒めの連鎖が起りやすく、自己卑下は褒めを引き出す装置(fishing for compliments)であると論じたが、本研究でも同様に自己卑下の後に褒めの連鎖が観察された。さらに、褒めと自己卑下を同時に検討したことで褒めも自己卑下の連鎖を引き起こすことが観察された。従って、褒めと自己卑下の連鎖は非常に複雑に互いを共起し合っており、これら2つの発話行為は連鎖として現れやすいことが分かった。評価という同一の行為ではあるものの、褒めと自己卑下は対極に位置しているように思われたが、実際は互いに密接な関係を持っており、表裏一体の関係であることが分かった。

次に、本研究では褒めと自己卑下への応答についての逸脱ケース(deviant case)の分析も行った。Pomerantz (1978)は褒めに対する応答(褒められた者の発話)として次の4つの発話に分類した。その4つの発話とは(1)自賛の回避(against self-praise)、(2)下方修正(downgrade)、(3)言及点の変更(referent shift)、(4)褒め返し(return compliments)である。本研究では上記に当てはまらない逸脱ケースとして、同意の発話が観察された。この現象を検討するに当たって褒めの連鎖が観察された断片以前の会話連鎖を観察したところ、褒めの発話者と褒められた者の間で明らかな知識差を認める発話が観察された。従って会話参与者間で、ある対象について知識を有する者とそうでない者の明らかなカテゴリーが成立していたため、褒められた者は否定をする必要が無いために同意の応答をするに至ったと考えられる。

さらに、自己卑下に対する応答についてもPomerantz (1984)は3つの発話(1)一部を繰り返す、(2)否定、(3)褒め、に分類した。本研究では上記に

当てはまらない逸脱ケースとして、同意の発話が観察された。この現象を検討するに当たって褒めの連鎖の逸脱ケースの検討と同様に、自己卑下が観察された断片以前の会話連鎖を観察したところ、会話参与者間で自己卑下が事実になりうる共通認識が確立する発話が観察された。事実の共通認識は、いわば自己卑下が事実であることを示す証拠であり、自己卑下を受けて応答する者はこの証拠に基づいて自己卑下を否定する必要が無い(できない)と判断した末に、同意の応答をするに至ったと考えられる。このように褒めと自己卑下の逸脱ケースを観察可能にしたのは、日常会話の録音・録画を用いた会話分析の手法を採ったためであると考えられる。これにより、如何にして会話参与者が規則性に従わない同意の発話をするに至ったかを観察することができた。

次に、韓国語母語話者を会話参与者に含むことで褒めの対象に特徴が見られた。金(2010)は、日本語は外見への褒めの出現頻度が低いが、その一方で韓国語は外見を話題にすることが多く、それを積極的に褒めることが多いと述べた。本研究においても日本語母語話者同士で外見について褒める様子は観察されなかった。しかし、本研究で取り上げた褒めの連鎖において日本語母語話者による韓国語母語話者の外見に関する褒めが行われていた。これは、データ中に韓国語母語話者が含まれるためなのか、日本語母語話者に韓国留学経験があるためなのか定かではない。しかし、今後の研究課題として会話参与者を様々な環境において、褒めの対象に変化が見られるのか検討してみたい。

さらに、会話参与者に韓国語母語話者を含むことにより、日本語母語話者同士の会話における自己卑下連鎖の特徴が観察された。その観察とは、Kim (2014)が日本語母語話者同士の会話における自己卑下を受けた応答として、自己卑下の発話をそのまま繰り返して同調する傾向が強いとしたが、本研究でもそれが同様に観察された点である。本研究における自己卑下を受けた応答として同調の発話が見られた例は3点で、3点共に日本語母語話者による自己卑下の発話であり、自己卑下の発話を繰り返して同調する応答も日本語母語話者によるものであった。従って、Kim (2014)が日本語

の自己卑下における繰り返しによる同調は、互いを同じ水準に置き、互いの強い関係性を保つことに重要な役割を持つと論じたように、本研究においても日本語母語話者による自己卑下の連鎖は繰り返しによる同調は会話参与者間の関係性の強化を図る役割を果たしていたのかもしれない。

最後に、第二言語話者を含む会話の分析として、褒めの対象について第二言語話者を含む会話であることに志向した様子が観察された。それは、第一言語話者が第二言語話者に対して言語能力を話題にして褒めることである。第二言語話者を含むことで必然的に母語である者とそうでない者というアイデンティティが発生し、結果として母語話者がそのアイデンティティに志向して言語能力を褒める行為が発生したと考えられる。

Abstract

This study explores sequences of compliments and self-deprecations in Japanese conversation between Japanese and Korean native speakers from a conversation analytic perspective. Previous studies have examined the various aspects of compliments and self-deprecation but have not explicated them sequentially. Therefore, in this study, I examined compliments and self-deprecation sequentially in order to understand how they influence and are influenced by the surrounding talk. Finally I describe characteristics of compliment and self-deprecation sequences deployed by Koreans who study Japanese as a second language.

Golato (2005) showed that compliment sequences often appear after self-deprecation sequences. Therefore, she termed self-deprecations "fishing for compliments." However, the opposite phenomenon, self-deprecation sequences appearing after compliment sequences, was also found in my data. This is because compliment sequences generally trigger self-deprecation sequences. Although both compliments and self-deprecations are categorized under the same speech act "evaluation," it seems that they have a polar relationship. However, actually, compliments and self-deprecations seem to be closely related to each other.

The occurrences of compliment sequences are also seen in Korean mundane talk. Kim (2010) mentioned that in Japanese society compliments regarding physical appearance are rarely given. However, in Korean society, people often comment on each other's physical appearance. My data aligns with Kim's observation that Japanese native speakers do not provide compliments on each other's appearance. There are, however, some compliments on appearance from Japanese native speakers to Korean native speakers. The reason for this phenomenon is not certain. It might have occurred because in the data used in my study there are Korean native speakers or there are Japanese participants with experience studying in Korea. In order to explain this phenomenon, for

future research, I would like to collect data which puts participants in various kinds of situations and analyze to see if and how compliments are accomplished.

Finally, this study also documented instances of compliments concerning the language proficiency of the participants since it included second language speakers of Japanese. This was observable when native speakers complimented the non-native speaker's language proficiency. Participants' identities as native speaker and non-native speaker were made relevant through the compliment sequences concerning the language proficiency of the non-native speaker. This could be one of the distinct features of interaction between expert and novice of the language of interaction.

目次

第1章	はじめに	p. 9
第2章	会話分析とは	
	2.1. 会話分析の開始	p. 10
	2.2. 会話分析の発展	p. 11
	2.3. 相互行為としての会話分析	p. 12
	2.4. 会話分析とその手法	p. 13
第3章	発話連鎖	
	3.1. 隣接対	p. 16
	3.2. 第二成分の種類	p. 19
	3.3. 優先性とは	p. 21
	3.4. 優先性の低い第二成分の特徴	p. 22
	3.5. 優先性から見る第一成分発話	p. 25
	3.6. 優先性の相互行為	p. 26
	3.7. 褒めることについての優先性	p. 28
	3.8. 自己卑下についての優先性	p. 32
第4章	日本語と韓国語の褒めと自己卑下	p. 38
第5章	使用データ	p. 41
第6章	褒めの連鎖	
	6.1. 褒めに対する自賛の回避の返答	p. 42
	6.2. 褒めに対する下方修正の返答および言及点の変更	p. 44
	6.3. 家族を対象とした褒めの連鎖	p. 55
	6.4. 褒めの連鎖における逸脱ケース	p. 56
	6.5. 褒めの連鎖についての考察	p. 57
第7章	自己卑下の連鎖	
	7.1. 自己卑下に対する否定の返答	p. 61
	7.2. 自己卑下に対する自身の類似体験談	p. 65
	7.3. 自己卑下に対する同調の返答	p. 67

7.4. 家族を対象とした卑下の連鎖	p. 73
7.5. 自己卑下の連鎖における逸脱ケース	p. 76
7.6. 自己卑下の連鎖についての考察	p. 80
第8章 まとめ	p. 83
注	p. 89
参考文献	p. 90
添付資料1 録音・録画データの表記法	p. 94
添付資料2 研究への参加同意書	p. 95

第1章 はじめに

本論文では韓国語母語話者を会話参与者に含む日本語での日常会話における、褒めと自己卑下について検証する。

まず、筆者が本研究に取り組むきっかけとなったことは、神奈川大学に派遣交換留学で来日する留学生のチューター制度をきっかけに韓国人留学生と接する機会が多くなったことである。彼らは非常に日本語に堪能で、日本人の友人と彼らを交えて会話をしていると、彼らが留学生であることを忘れてしまう瞬間さえあった。さらに、筆者は韓国ソウルへの派遣交換留学の経験から韓国語を理解し、日本語母語話者からの視点のみならず韓国語話者としての視点も兼ね備えているため、韓国語母語話者を含む会話の分析に多角的な視点から取り組むことができると考えたためである。

一般に、アジア圏の文化において自己卑下は聞き手に悪印象を与えるものではなく、むしろ自己卑下の表明により聞き手から好印象が得られるとされる。実際に日本人とカナダ人の自尊心及びその自己呈示に関する国際比較を行った山口・Tafarodi (2004)によると、日本人の場合、自己利益特性を高く自己評価する者はそうでない者よりも好まれないと結論付けられている。一方で、カナダ人は自己評価特性も他者利益特性も平均以上であると表明することが最も好ましい印象を与えると報告している。さらに、山口・Tafarodi は、ハワイ在住のアジア系住民(日系、中国系、ベトナム系、フィリピン系)だけを取り出し、アジア系住民文化での印象形成の様子も確認した。すると、アジア系住民文化でも、日本と同様に自己利益特性と他者利益特性を共に高く自己評価する者は、自己利益特性を低く評価し他者利益特性を高く評価する者よりも魅力度が低いと判断されるという研究結果が出た。従って、アジア文化圏では自己利益特性に関する自己卑下は他者から良い印象を得るためのものであると解釈できるようだ。

また、この自己利益特性を低く評価するという結果から、褒められたらそれを否定するという行為が、周囲から魅力度が高いと判断されると言える。そこで本研究では、アジア系住民文化圏である日本人と韓国人は、褒めと自己卑下に対してどのように反応するのか、実際の会話のビデオ録画

を分析して検討して行きたい。

続いて本研究の章立てについて紹介する。まず、2章では研究手法である会話分析について述べる。次に3章では発話の優先性という視点から褒めと自己卑下について述べ、4章で日本語と韓国語の褒めと自己卑下についてまとめる。そして5章では使用データの詳細について述べ、6章及び7章で筆者のデータを基に褒めと自己卑下の発話連鎖について分析する。褒めと自己卑下の発話行為の研究は、現在までのところ、「褒めの発話」「褒められた人の発話」「自己卑下の発話」「自己卑下を受けた発話」という様に、それぞれ別の発話行為として検討されてきた。しかし、今回「褒めの発話と褒められた人の発話」「自己卑下の発話と自己卑下を受けた発話」という様に連鎖という一括りとして検討し、さらに褒めと自己卑下を同時に分析することにより、褒めや自己卑下が互いにどのような関係性を持つのか検討したい。

第2章 会話分析とは

2.1. 会話分析の開始

会話は言語活動の中で、最も頻繁に見られる行為の一つである。人間は会話に依って、社会化し、互いの関係性を保っている。会話をする時、私たちは言語コミュニケーションの形式を採るが、単なる言語の使用以上の相互行為(視線やジェスチャー、沈黙など)を含みながら会話を実行している。

会話分析開始以前の言語学分野では、規則的なルールを基に巧みに会話することや、会話の有り方、言語を最大限効果的に使用する方法などの社会的なルールを提示することに重きが置かれていた。さらに、ここでの会話は庶民ではなく、エリート階級をターゲットとした上流社会(polite society)への提言に留まったことも特筆すべきであろう。しかしながら、会話は単にエリート活動ではなく、むしろ庶民的で日常的なものであり、社会活動の骨組みである。

さらに、日常会話はチョムスキーなどの言語学者によって、非言語的要素

因によって負の影響を受けた不完全な存在とされ、長らく研究対象から除外されていた。このような言語の見方は、会話やコミュニケーションが言語ルールに当てはまらないものという位置づけを与えた。しかし、社会活動における会話を理解することの重要性は徐々に認められ、1960年代より、会話分析が研究分野として知られるようになってきた (Goodwin & Heritage, 1990; Heritage, 1989)。

2.2. 会話分析の発展

会話分析は、ハロルド・ガーフィンケル及びアーヴィング・ゴフマンの研究を基に生じた研究分野である。ハロルド・ガーフィンケルは社会学の分野におけるエスノメソドロジー(方法論)の創設者であり、対面コミュニケーションを研究する中で、人々の日常生活における道理にかなった手続き (sense-making procedures) を理解することに重きを置いた人物である。ガーフィンケルは社会構成員である人間が、個人の置かれた社会状況を認識することを通して、その状況に適切な行為を理論的に理解し、算出する過程を把握することに努めた (e. g., Garfinkel, 1967)。ここでの適切な行為とは細田 (2014) によれば、「あいさつ」を例にすると、ガーフィンケルが究明しようとしたのは、儀礼としての「あいさつ」そのものの描写ではなく、いつ、どのようにして人々があいさつの連鎖を始めるのか、どのような言語の形であいさつを算出するのか、あいさつをする人及びされた人はそれぞれ相手の言ったことをどのように理解するのかといった経験的なことである。従って、私達があいさつを行うためには、実際のあいさつに先立ってそのあいさつという儀礼を理論的に理解していることと、その儀礼に関しての常識を持ち合わせていることが必要である。最後に、ガーフィンケルは主観的なものには全く意味がなく、理解不能なものに留まるとした。この観点について串田・好井 (2010) は、自分にだけ通用する私的な言語は、他者に通用しないという意味で無意味であり、他者には理解できないという説明を付けた。

一方ゴフマンは、相互行為における儀礼を吟味したという点ではガーフ

インケルと共通するが、対面コミュニケーションの規則はそれが行われる場面ごとに存在し、相互行為の規則が社会活動と密接に関係している、ということを示すことに努めた。ゴフマンは相互行為が、社会活動における単なる情報伝達手段としてのみでなく、相互行為自体が独自の規則を持ち合わせているとした。その独自の規則性を解明する例として、あいさつに挙げられるアクセスの儀礼 (Access Rituals) (Goffman, 1971) や公共の場で他人の空間を侵害しないようにある程度の距離を保とうとする回避の儀礼 (Avoidance Rituals) (Goffman, 1967) を示した。ゴフマンは場面によって個人の行為が異なっていたとしても、無意識的にとる儀礼は普遍的であると論じた。この普遍性は先に述べた回避の儀礼においては、初対面の人に顔を近づけすぎると無礼に当たるため、少々距離を置くようにすることが例として挙げられる。

このように、ガーフィンケルの道理の理解と実行に関する側面と、ゴフマンの対面コミュニケーションにおける相互行為の場面的規則性の側面を基に、今日の会話分析が形作られるようになった。

2.3. 相互行為研究としての会話分析

Heritage (1984) は会話分析の目標は、話し手が社会的秩序の上に成り立った相互行為に従って発話することを解明・解説することであると述べた。さらに、この目標を達成するための最も基本的なところは、会話参与者自身の発話行為の手続きを描写し、他の場面でみられる同様の発話行為を理解することにあるとした。従って、会話分析は、会話参与者は社会的な秩序に基づいて行為を行っているという仮定を根源とする。この秩序の理解及び共有こそが会話分析の命題である。

Heritage (1984) は、発話行為はコンテキスト内でのみ有効で、発話行為は文脈依存 (context-shaped) と文脈更新 (context-renewing) の2つの役割に分けられると分析した。文脈依存とは、会話参与者の発話は文脈によって形作られ、各発話はその直前に起こったことの観点から理解されることを示す。一方、文脈更新とは、発話が次の文脈に作用したり規制したりす

ることを示し、同時に文脈は動的であり、それぞれの発話時点で更新されていくものであることも示した。従って、文脈の理解と可動性の把握を経て発話権を掌握することは、公的に会話参加者に自らの発話内容の理解を示すことが可能であるとした (Goodwin & Goodwin, 1992)。

文脈が相互行為と非常に密接に関係する一方で、何によって適切な背景情報が引き起こされているかについて観察する必要がある。Schegloff (1992)は、背景情報は相互行為外のものと、相互行為内のものに二分できるとし、相互行為外の背景情報とは、社会的カテゴリー・関係・組織・文化などの背景が含まれることを指した。次に、相互行為内の背景情報とは、参加者の会話を通して生み出されるものを指した。これら背景情報について考える上で最も重要な問題は、相互行為外の背景情報のどの範囲までが相互行為の過程で会話参加者に関連があるかを決定することである。Schegloff (1992)は、研究者が事前に掴んだ会話参加者についての背景情報を分析に押し付けてはならないが、自然発生的会話内において会話参加者自身が自らの背景情報に言及した場合は、それを分析に反映しても良いとした。

2.4. 会話分析とその手法

会話分析に用いるデータは、実際に起こったコンテキストでなければならず (Heritage, 1995)、分析するための情報や根拠は、全てデータ内で起こる一連のコンテキストに拠らなければならない。実際に起こった会話を用いることは、字面での発話の分析のみに留まらず、話し手が一連のコンテキストにおいて本当に意図する行為は何かについての分析を可能にする。また、ten Have (2007)は、会話分析ではそれぞれのデータを先入観を持って観察してはならず、全ての発話行為に関する現象は、録音・録画されたデータ内から証拠を提示しなければならないとした。すなわち、分析者の判断によって、発話行為を秩序立てるのではなく、話し手自身によって使用された発話行為自体に志向する必要がある。

録音・録画されたデータについて Heritage (1984, 1995)は、会話の相

互行為を観察するにあたって最も豊かで優れた情報源になると述べた。一方で、分析者の記憶のみに頼った観察記録は、無意識に分析者自身の編集が加わる場合もあり、一連のコンテキストにおける参与者の発話行為の正確な理由付けが困難になる可能性がある。さらに、Pomerantz & Fehr (1997) も、録音・録画を基に観察することが好ましいとした。その利点として、録音・録画されたデータは繰り返し再生することで、トランスクリプトの改善や相互行為の分析の性能を上げることが可能であり、後日研究項目の変更が伴っても新たな視点で既存の録音・録画をデータとして用いられることを挙げた。

Hopper (1988)や Psathas (1995)は研究の初期段階の心得として、動機無しの観察(unmotivated looking)を挙げた。動機無しの観察とは、先入観や研究課題を持たずに、データ内で実際に何が起きたかを繰り返し観察し、分析することである。そして、Psathas (1990)の述べるように、動機無しの観察とは、分析者が特定の理論や想定された理論を前提として持つことを避け、雑念を持たずに常にオープンな視点で観察することも含むとした。また、Schegloff (1996, p. 172-173)は、会話参与者の行為の理由付けには以下の3つの手順が必要であると述べた。

1. 会話内で、会話参与者がどのような発話デザイン・発話行為をしているか観察する。
2. 観察された発話行為が参与者の意図に従っているか否かを観察者の視点ではなく会話の中で表明された参与者の意図に志向して確認する。
3. 手順1・2は動機無しの観察の必要条件であり、会話分析の重要な手順である。

これらの必要条件から、分析の開始時点ではオープンな視点を持って取り組むが、そこから観察された行為を規則化することは、正確な根拠付けを伴い、非常に慎重な手順を踏むことが必要とされていることが分かる。会

話参加者の行為の根拠付けは、同様または似通った行為の例を多数集めたコレクションによって行われる。動機無しの観察を通してコレクションを作ることは、その行為が規則性を持っていることを観察するのに効果的な方法であり、規則性を証明するために必要なステップである。

しかし、コレクションを作ることは、会話分析が量的研究を基本とすることを示している訳ではない。具体的に数量化して表現することが、会話参加者の行為を証明することに繋がるように感じるが、会話分析において数的研究は好ましくない。何故なら、会話分析で用いられるコレクションはコンテキストに拠ったものであるため、それぞれが独立した例として扱われるからだ。従って、コレクションを用いた研究は、研究対象の行為が、異なる会話参加者や異なる文脈においても生み出される規則的な共通性を持つものであることの証明を可能にする。

会話分析では、実際の相互行為の分析から会話の持つ規則性を探し、他の文脈にも適応させる帰納法を採る (Heritage, 1988)。しかし、分析者はその規則性の証明だけにとどまらず、見出された規則性が会話参加者に志向し、会話参加者によって産出されたものであることを示すことも求められる (Heritage, 1988)。相互行為のコレクションにおいて、「逸脱ケース」(deviant case)の分析が非常に重要である。Schegloff (1968)は、会話分析の観点では、逸脱ケースは例外とみなさず、まだ現象として説明されていない規則として示されるとした。従って、逸脱ケースは、相互行為の規則性に従わない現象として説明される。ここで、規則性に従わない現象であると証明するには、逸脱ケースがどこまで規則性に志向した行為であるのか、またはどれ程規則性から外れた行為か、そしてなぜその例は「逸脱」するに至ったのかを説明する必要がある。そして、会話参加者が彼等自身の行為の中で、その逸脱性に志向することにより逸脱ケースの逸脱性の証明が可能となる。さらに、本来の相互行為の規則性を逸脱ケースを含む理由付けで描写することにより、より包括的で普遍的なものとして示すことができるようになる。

第3章 発話連鎖

3.1. 隣接対

会話において発話は「挨拶—挨拶」「呼び掛け—応答」「質問—答え」のように基本的に2つのペア構造を持つ。Schegloff & Sacks (1973)は、発話のペアの現象を隣接対(adjacency pairs)と呼び、隣接対は会話の連鎖を構築していく上で最も基本的な構造であるとした。さらに隣接対は(1)2つの順番で構成され(2)異なる話し手による発話で(3)それらの発話は隣り合っており、(4)その2つの発話には決まった順序があり(5)それら2つの発話はペアとして分類されるものという5つの要素が満たされることで成り立つとした。まず、隣接対は基本的に2人の異なる発話による2つの発話順番で、間に他の発話を挟まずに隣り合っている場所で観察される。次に、隣接対を作る2つの発話順番は順序立てられており、質問の後に答えが来るように、最初の発話に続いて次の発話が起る。従って、最初の発話が次の発話を引き出すようにデザインされており、最初の発話を第一成分(First Pair Part)、次の発話を第二成分(Second Pair Part)とすることができる。次に、第一成分と第二成分の関係性は、産出された第一成分の種類によって決定されるため、第二成分は第一成分が引き出そうとした行為に適切なタイプの発話でなければならない。従って、第一成分で「質問」が為された際には、隣接対が完成されるような適切な「答え」が続かなければならない。以下は、会話の相互行為に見られる隣接対の例である。

(3.1) [作例] 質問—答え

- 01 A: 今何時?
02 B: 5時ちょっと前.

(3.2) [作例] 挨拶—挨拶

- 01 A: おはよう.
02 B: あ おはよう.

(3.3) [作例] 呼び掛け一応答

01 A: ね:ね:?

02 B: ん?

(3.4) [作例] お祝い—お礼

01 A: 卒業おめでとう.

02 B: ありがとう.

これらの例で観察できるように、第一成分で次に来るべき行為を指定し、第二成分で指定された行為が完了するように反応している。このように、2つのターンが一緒になって一つの行為が完成するため、基本的な連鎖は、2つの順序で完成すると言える。

隣接対について Heritage (1984)は、会話参加者は常に会話の連鎖構造に志向しているため、隣接対は会話において規範的な役割を持ち、隣接対は会話が進む方向を予測可能にする役割を持つと述べた。さらに、隣接対の持つ予測可能性から、発話が予測通りに進まない場合、会話参加者はその問題性に志向するとも述べた。従って、順番の最初に産出される第一成分が第二成分の発話を引き起こし、さらに第二成分の発話内容を制限していると言うことができる。Schegloff & Sacks (1973)はこれを関連性のルール(relevant rules)とした。関連性のルールとは、第二成分は第一成分が期待した行為に適切に応えなければならないことを示したものである。しかし、実際の会話の連鎖構造においては、この関連性のルールに従わない場面も観察される。このように、一旦ルールに背いた行為が成されると、会話参加者はルールからの逸脱や特別行為が開始されたことに志向する。従って、(3.5)のように第二成分が産出されない状態は、関連性のルールの観点から、応答の不在とみなされ、第一成分発話者がルールからの逸脱に志向したシークエンスを展開し始める。

(3.5) [(Liddicoat, 2011, 141) Lunch]

- 01 Harry: Didjih speak tuh Mary today?
 02→ (0.2)
 03 Harry: Did yih speak tuh Mary?
 04 Joy : Oh, yea:h I saw her at lunch.

(3.5)では、1行目でHarryが「質問」の第一成分を述べており、同時にJoyの「答え」の第二成分を期待していることが分かる。しかし、本来はJoyの「答え」が期待された2行目で沈黙が発生してしまう。ここでの沈黙は、会話参加者が誰も発話していない状態を意味するのではなく、他でもなくJoyの応答の不在として扱われる。Harryは2行目のJoyの沈黙に対して、3行目で自身の1行目の発話を再生することで応答し、4行目のJoyの第二成分を引き出すための第一成分として更新した。その結果、4行目でJoyは適切な第二成分を発するに至っている。Stivers & Robinson (2006)は、(3.5)の2行目に見られるような沈黙を、「質問」に対して「答えの不在(non-answer response)」とした。彼らによると、答えの不在は(3.5)のような沈黙以外にも「分からない(I don't know)」も含まれる。「答えの不在」のシークエンスは、好まれない。「分からない」という答えの場合には「質問」に対して「答え」という行為自体はなされているが、第一成分発話者が必要とする情報を得ることができないという点で、第二成分として好まれないのだ。

さらに、(3.6)のように第一成分の直後に、第二成分を発話するのに必要な情報を得るための連鎖が挿入されることもある。

(3.6) [(Liddicoat, 2011, 141) Lunch]

- 01 Joy : 'N whaddya think 'v Brett,
 02 Harry: Brett?
 03 Joy : The new guy in accounts.
 04 Harry: Oh. He seems oka:y.

(3.6)では、1行目のJoyの「質問」の第一成分に対する「答え」の第二成分は4行目のHarryの「Oh. He seems oka:y」の発話である。この基本の隣接対に挿入されているのが、2行目のHarryの確認要請の第一成分である「Brett?」と、それに対する答えの第二成分の「The new guy in accounts.」である。一見すると、1行目の「質問」に対するHarryの「答え」に遅延が発生しているようだが、ここでの遅延は確認要請という行為で説明可能であり、第一成分発話者のJoy自身も、2行目でHarryが「質問」という第一成分に対して関連性のルールを無視した発話を行ったという風には認識していない。従って、基本の隣接対の間に他の連鎖が挿入されても、会話参加者が基本の隣接対が完成していないことに志向しているので、会話参加者間で十分に必要情報共有が完了した時点で、基本の隣接対に戻っていることが確認できる。

3.2. 第二成分の種類

隣接対の中には単一の第二成分しか持たないものも存在し、その最も一般的な例が「挨拶」である。(3.2)のように、「挨拶」の第一成分においては、「挨拶」の第二成分のみが従属可能である。このような単一の第二成分を持つ隣接対は、第一成分及び第二成分共に共通したフォームの発話である場合が多い。

しかし、隣接対の多くは「はい/いいえ」で答える極性疑問文のように第二成分が2種類存在する。この場合、「はい/いいえ」を選択する際の規則や、期待されうる第一成分と第二成分の連鎖に注目することで、会話の相互作用の構造を検証することができる。以下は、第一成分に対して多項的な第二成分が存在する例である。

(3.7) [(高木, 2014) nashi] 依頼—受諾

01 A: =うん そし-そしたらうちの分も一緒に=

02 B: =[うん.

03 A: =[買ってきてくれるとありがたいんだけど.]

04 B: はいはい.

(3.8) [(高木、2014) MM_K1] 依頼一断り

01 S: ¥あ(hh)の(h):さ(hh): :¥.hh

02 T: [はい.

03 S: [きょうさ:あの:[: :]ケーワンやんじゃん↓か: : :]

04 T: [はい]

05 (.)

06 T: は:い.

07 S: だ: :またさ: :Tのさ: :家でさ: :

08 (.)

09 T: あ: :[あの: そうしたいん: ですけど: :[: , お]れ=

10 S: [あの: : : [う: ん]

11 T: =今日バイト入ってですね: :

12 S: いつまで?

13 (.)

14 T: やちょうど(3.0)9時から始まって: : =

15 S: =うん=

16 T: =いちじ: : : ぐらいまであるんで: :

17 S: あ[(れ)

18 T: [ちよ: っと厳しいん>ですよ〜ね: : =今日も明日もはいつちゃってるん

19 すよ: :

例(3.7)及び(3.8)は、第一成分の行為は共通して「依頼」であるが、第二成分に焦点を当てると、(3.7)は「受諾」で(3.8)は「断り」と異なった行為がみられる。双方共に隣接対は完了しているため、この例では「依頼」に対して「受諾」と「断り」という2種類の第二成分が存在していることが観察可能である。多くの隣接対が同様に多項的な第二成分を持つが、こ

れは産出可能な第二成分の候補が全て相互行為上同じように取り扱われるとは言えない。実際に、(3.7)に見られるような「受諾」の第二成分は社会的及び相互行為的に(3.8)に見られるような「断り」の第二成分より産出が容易である。これら2例の間の違いは優先性の理論によって説明可能である。

3.3. 優先性とは

会話において、会話参加者は第二成分の種類を自分の意思で選択することができ、どの第二成分を選ぶかによって相互行為的に異なった意味を持つようになる。Atkinson & Heritage (1984)は、優先性の観点から多項的な第二成分は、その選択頻度において、産出頻度が対等ではないとした。これを言い換えると、極性疑問文を観察した際に「いいえ」よりも「はい」の場合の方が頻繁にみられ、その理由の一つに、第二成分話者が優先性の高い回答をデザインすることが挙げられる。

(3.7)及び(3.8)を例にとり優先性の理論を検討する。(3.7)の「受諾」のシーケンスを見ると、1・3行目でAが「依頼」をすると、Bは4行目で回答の遅延なしに「受諾」を行っている。一方で(3.8)の「断り」のシーケンスでは、明確に発話行為として産出されてはいないものの、SがTに対して「Tの家でケーワンを観戦したい」という「依頼」を行っている。これに対して、9・11・14・16・18行目のTの回答では、各発話内に沈黙や言い淀み等による遅延を含む発話デザインを採っていることが観察できる。さらに、18行目の断りの発話も直接的に断ったり拒否する様子は観察できず、「バイト」という断るに正当な理由付けを述べるに留めている。

(3.7)のように、日常的に遅延なく生産されることが優先性の高い行為の特徴であり、一方で、遅延が含まれたり、行為そのものを直接的に行うことが躊躇されるものが優先性の低い行為とされる。「招待」を例にとると、「招待—受諾」と「招待—断り」が隣接対構造として観察でき、前者が優先性の高い行為、後者が優先性の低い行為として分類可能である。優先性の高さ及び低さの概念は本質的に社会行為的観点から判断され、もし、第

一成分を受けて、第二成分発話者が優先性の低い回答を発話しようとするれば、優先性の高い回答をする時よりも、互いの関係性を守るために多くの労力を必要とする発話デザインを用いなければならない。一般的に、「同意」や「受け入れ」は優先性が高く、「非同意」や「断り」は優先性が低い。しかしながら、この優先性のルールは文脈によって異なり、自己卑下の第一成分には、非同意の第二成分が優先性が高くなる(Pomerantz, 1984)。

さらに、ここで留意する点は、会話分析において優先性といった時には、会話参加者の心理的な希望や動機、好き嫌いを指すわけではないことである。本当は来てほしくない人を飲み会に礼儀上招待する時が(3.9)及び(3.10)である。誘い手である後輩としては先輩抜きで気楽にパーティーをしたいと考えていても、「誘う」という行為をする以上、(3.9)のように、2行目で先輩に「受諾」をしてもらうことが優先性が高く、(3.10)の2行目のように断られることが優先性が低い。そして優先性が低い回答をする場合にははっきりとした断りよりも(3.10)に見られるように謝罪や言い訳が用いられることが多い。

(3.9) [作例] 誘い—受諾

- 01 後輩： 金曜日家でパーティーするんですが、先輩もいらっしゃいませんか？
 02 先輩： あ、行く行く。
 03 後輩： じゃ、4時に白楽駅で会いましょう。

(3.10) [作成] 誘い—断り

- 01 後輩： 金曜日家でパーティーするんですが、先輩もいらっしゃいませんか？
 02 先輩： ごめんその日バイトだ。
 03 後輩： そうですか。

3.4. 優先性の低い第二成分の特徴

3章3節において、第二成分には優先性が存在しており、第二成分発話者が優先性の低い回答を発話しようとするれば、優先性の高い回答をする時

よりも、互いの関係性を守るために多くの労力を必要とする発話デザインを用いなければならないと述べた。ここからは、優先性の低い第二成分を産出する際の特徴を検討して行く。3章2節において提示した(3.8)を以下に(3.8')として再掲する。

(3.8') [(高木, 2014) ML_K1] 依頼一断り

01 S: ¥あ(hh)の(h):さ(hh): : ¥.hh

02 T: [はい.

03 S: [きょうさ:あの[::]ケーワンやんじゃん↓か: : :

04 T: [はい]

05 (.)

06 T: は:い.

07 S: だ: :またさ: :Tのさ: :家でさ: :

08 (.)

09 T: あ: :[あの: そうしたいん: ですけど: :[: , お]れ=

10 S: [あの: : : [う: ん]

11 T: =今日バイト入ってですね: :

12 S: いつまで?

13 (.)

14 T: やちょうど(3.0)9時から始まって: :=

15 S: =うん=

16 T: =いちじ: : ぐらいまであるんで: :

17 S: あ[れ)

18 T: [ちよ: っと厳しいん>ですよ<ね: : =今日も明日もはいつちゃってるんで

19 すよ: :

(3.8')は、1・3・7行目においてSが「Tの家でK-1を観戦したい」と依頼している。そして、Tは8行目に間を置いて、9行目で音の伸びを伴って「あの: そうしたいんですけど」と発話を開始する。9行目では、「自分の

意思に反して」という反事実条件の前置きを文頭に持ってきて、優先性の低い「断り」の発話を仄めかしているが、実際の断りはまだ現れない。さらに、断り自体を差し置いて、Tが述べているのは、「バイトに行かなければならない」という事実であり、依頼を断る正当な理由である。さらに、18行目で発される断り自体も「ちょっと」という程度副詞を伴って緩和表現としており、直接的に断ったり拒否する様子は観察できない。ここから、遅延や言い淀みを含むことのない優先性の高い回答の一方で、(3.8')で観察されたように、優先性の低い回答が必要な際には、発話者は様々な発話テクニックを組み合わせ、第一成分発話者にとっての優先性の低さを緩和させる方向に発話をデザインする必要がある。

(3.8')で観察した優先性の低い第二成分の特徴を Liddicoat (2011)は、優先性の高い第二成分の特徴と比較しながら以下の5点にまとめている。

1. 優先性の高い発話は、基本的に遅延を伴わない。
2. 優先性の低い発話は、発話順番内で遅延を伴うことが多い。
3. 優先性の低い発話は、前置きが存在することが多い。
4. 優先性の低い発話は、理由付けが伴うことが多い。
5. 優先性の低い発話は、一見すると優先性の高い発話のように振舞うことがある。

まず、特徴1について(3.7)を用いて再度検討すると、1・3行目でAが「依頼」した後に、Bは4行目で「受諾」を行う様子が観察できる。従って、依頼と受諾の連鎖の間に沈黙や音の伸びが見られない点から、優先性の高い発話は遅延を伴わないと言える。

次に、(3.8')について上記特徴2~4を当てはめて整理する(特徴5は後述)。特徴2の遅延は、Tの各発話に顕著に現れているコロンの(:)で示される音の伸びであり、核心的な優先性の低い発話をできるだけ遅らせて優先性の低さを緩和させようという試みの現れである。次に、特徴3は9行目の「あの:」や「そうしたいんですけど」の前置きで、これも特徴2と同

様の働きが認められる。最後に特徴4は11行目の「今日バイト入っててですね」や16行目の「いちじぐらいまである」という理由付けで、自らが優先性の低い行為をする正当な権利を持つことを相手に示している。

次に(3.8')で観察されなかった、優先性の低い第二成分の特徴5を考察する。

(3.11) [(Sacks, 1987, 63) NB II 2]

01 A: 'N they haven't heard a word huh?

02 B: Not a word, uh-uh. Not- not a word. Not at all.

03 Except- Neville's mother got a call

(3.11)は、Aが1行目に「(誰にも)何も連絡無かったよね?」とBに質問する。これは、連絡が無いことを前提とした質問なので、優先性が高い第二成分は「ない」で、優先性の高い第二成分は「ある」である。Bの回答が開始された2行目は、「全然無かったよ。」という、優先性の高い回答をするが、3行目では一転、「ネビルのお母さんが電話を受けた以外はね」という当初の回答とは異なった発話を加える様子が観察できる。よって、Bは一見優先性が高い発話をすることによって、優先性が低い回答をすることを順番内で遅延させ、優先性の低さを緩和するデザインを採ったと言える。特徴5は日本語会話においては「いいね、でも+優先性の低い発話」や「ありがとう、でも+優先性の低い発話」などが観察可能である。

3.5. 優先性から見る第一成分発話

3.4で述べた優先性の低い発話の特徴(特に遅延)は、第一成分発話者が第二成分に優先性の低い発話が来るであろうことを予測可能にする。さらに、優先性の低い発話を予測することは、第一成分発話者が、実際に第二成分として優先性の低い発話が行われることを防ぐことを可能にする。

(3.12) [(高木、2014) MM_K1] 確認—非同意

- 01 A: で軽井沢って温泉 : : (.)あるよね?
 02 B: (1.0)
 03 A: ゆ : : うめいではないんだけど : : でも温泉 :
 04 B: 。あ : : でも。
 05 A: わからない?hh
 06 B: 。わからない。でも軽井沢って(.)避暑地ですよ?

A の「軽井沢って温泉あるよね」の質問の第一成分の後に、本来なら 2 行目で B の回答の第二成分が発話されるはずだが、B は沈黙で回答の遅延をしている。そして、3 行目で 2 行目の沈黙を受けて A は温泉がある事実は変えないが、下方修正(downgrade)して「有名ではない」という発話を加えた。それでも B は 4 行目で「あ : : でも」と前置きと音の伸びで回答の遅延をしている。回答の遅延は優先性の低い第二成分を発話するマーカであるため、A は B が選好性の低い発話をすると気づき、A は 5 行目で「わからない?」と発話する。「わからない?」と聞かれた場合の優先性の高い発話はその質問に対する同意、つまり「わからない」であり、A は B から選好性の高い発話を引き出せるように発話をデザインした事が分かる。この例から、第一成分発話者は、随時発話デザインを変えながら、第二成分発話者の優先性の低い発話の実行を避けていることが観察できる。従って、3 章 4 節で述べた第二成分発話者の特徴と併せて、両者が優先性の低い発話の回避を相互行為としてデザインすると言える。

3.6. 優先性の相互行為

上記までで、第一成分発話者と第二成分発話者が共同で優先性の高い発話連鎖をデザインすることを述べたが、同じことが「評価」の連鎖でも観察できる。Pomerantz (1978, 1984)は、評価の連鎖において第二成分発話者は、第一成分で述べられた評価を上方修正(upgrade)することが優先性が高いことを示した。

(3.13) [Pomerantz, 1984, 59]

- 01 J: T's-tsoh beautiful day out, isn't it?
 02 L: Yeh it's just gorgeous

(3.13)は、1行目のJの「beautiful day」という評価の発話を、2行目でLが「gorgeous」と上方修正している例である。次の(3.14)も同様の例である。

(3.14) [Pomerantz, 1984, 60]

- 01 A: Isn't he cute
 02 B: O::h he::s a::DORable

BはAの「cute」という評価を「adorable」に上方修正だけでなく、声を大きくすることで、評価に同意したことを示している。一方次は、第二成分発話者が一見同意の姿勢を見せるが、すぐに下方修正つまり是非同意をする例である。

(3.15) [Pomerantz, 1984, 67]

- 01 E: 'n she said she f- depressed her terribly
 02 J: Oh it's [terribly depressing.
 03 L: [oh it's depressing
 04 E: Ve[ry
 05 L: [but it's a fantastic [film.
 06 J: [It's a beautiful movie

1行目で、Eが映画を「depressed terribly」と悪い評価を下し、それに対してすぐさまJとLがterriblyという副詞を抜いて「depressing」とEの評価に下方修正する。しかし、4・5行目において、JもLも前述の評価

を逆転させ、「fantastic」や「beautiful」と良い評価を述べている。(3.13)及び(3.14)のように第一成分に対して上方修正して同意する場合は、第二成分発話者の実際の発話行為も同意が多く見られるが、(3.15)のように同等や下方修正した場合は、実際の発話行為として優先性の低い第二成分つまり非同意であることが多い。しかしながら一見すると同意しているようにも見えるので、これは、3章4節の優先性の高い第二成分の特徴5の「一見すると優先性の高い発話のように振舞う」に当てはまる。

(3.16)は第一成分発話に対して下方修正した返答を受けた場合の例である。

(3.16) [Pomerantz, 1984, 69]

- 01 G: That's fantastic.
 02 B: Isn't that good.
 03 G: That's marvelous

1行目でGが「fantastic」と評価したことに対して、2行目でBは「good」と下方修正している。しかし3行目でGが再度「marvelous」と1行目の「fantastic」を上方修正した発話をしていることから、「評価」の連鎖は基本的に「同意」が好まれ、Gはその優先性に志向してより優先性の高い上方修正の同意を追及していると言える。

3.7. 褒めることについての優先性

褒めることについての優先性も、褒めが評価の一種であることから、3章6節で見たように同意や褒めの受け入れが優先性の高い回答であると考えられる。しかし、Pomerantz (1978)によれば褒めのシーケンスでは自賛を回避するように導くことが優先性の高い行為であるとのことだ。そして彼女は会話参与者自身による褒めや称賛を制約する自賛の制約体系 (a system of constraints) が存在するとした。この体系を実例と共に提示していく。初めに第一成分発話者が自賛の制約体系に従わなかった場合、第

二成分発話者は自身の発話順番内で体系の未履行について指摘するという例である。

(3.17) [(Pomerantz, 1978: 89) HS:S]

- 01 A: Just think of how many people would miss you.
 02 You would know who cared.
 03 B: Sure. I have a lot of friends who would come to the funeral
 04 and say what an intelligent, bright, witty, interesting
 05 person I was.
 06 A: They wouldn't say that you were humble
 07 B: No. Humble, I'm not.

(3.17)では1・2行目においてAが「Bは人気者である」という発話をしている。BはAの発話を受けて「I have a lot of friends who would come to the funeral and say what an intelligent, bright, witty, interesting person I was」と、自賛の発話をしたが、この発話は自賛の制約体系に違反しているため、続く6行目においてAは「They wouldn't say that you were humble」と発話し、Bへ自賛の制約体系の未履行を指摘しようとした。しかし、この場合6行目でBは「No. Humble, I'm not.」と発話していることから、Aによる未履行の指摘に同意していると言える。

また、話し手は自身の発話を制限したり棄権することにより、自賛に対して慎重な姿勢を取る。

(3.18) [(Pomerantz, 1978) S.2]

- 01 G: Ken gave that internship to Peter!? I'm much better than
 02 he is! Well maybe I shouldn't say that.

(3.18)では、G自身が手にするはずであったインターンシップをPeterに取られてしまったために、Gは「I'm much better than he is」と発話し、

自身が Peter より優れていると自賛の発話を行った。しかし、すぐに「I shouldn't say that」とすることで、これ以上の自賛を避け、発話を制限する姿勢が観察できる。

(3.17)及び(3.18)において自分自身による褒めの発言で自賛を導いてしまう例を検討した。しかし、褒めは評価であるため、会話参加者から「褒められる」という連鎖も展開され得る。この場合、上記のように社会的には自賛を避ける発話デザインを採ることが望ましい。しかし、「褒める」という発話行為をした第一成分発話者にとって、自賛を避ける回答を受けることは、自身の評価に対して非同意を受けたこととなり、幾らか優先性の低さが生じる。従って、褒められた者である第二成分発話者は自賛を避ける発話と第一成分発話者への優先性の配慮という2つの矛盾の中において発話選択を強いられているといえる。

そこで、Pomerantz (1978)は、この矛盾を解決する第二成分発話を4点提示した。

1. 自賛の回避 (against self-praise)
2. 下方修正 (downgrade)
3. 言及点の変更 (referent shift)
4. 褒め返し (return compliments)

以下に例を挙げながら褒められた際に見られる第二成分発話の特徴を4点考察する。まず(3.19)は「自賛」の回避の例である。

(3.19) [ILO-KAS-MIA、39:10-39:18、ILOさんイケメン]

- 01 MIA : でも背高いからモテるでしょ. 韓国で.
 02 (0.9) ((ILO 視線をそらす))
 03 KAS : 。うん。
 04 ILO : 。いや : す-いや俺モテたことね : わ.
 05 (.)

- 06 KAS : でもほら[今まで別に-
07 ILO : [一回も、一回も、

(3.19)は筆者の所有データである。会話参加者はMIA・KAS・ILOで、MIA・KASが日本語母語話者、ILOが韓国語母語話者である。まず1行目で、MIAがILOを背が高いためにモテると評価している。次に4行目では、ILOがMIAの1行目の第一成分に対する隣接対の自賛を避ける否定の第二成分を発話している。しかし、非同意の第二成分の直前に「いや:」という否定ではあるものの語尾を伸ばした言い淀みともとれる発話があり、優先性の低い発話行為の遅延が見られる。ここから、褒めに対する第二成分として自賛を避ける非同意が優先性が高いと言うことに加えて、第一成分発話者の発話デザイン次第では、第二成分で非同意の発話行為を緩和させるデザインを採ることも観察された。最後に7行目においては、ILOは完全に1行目での褒めに対して自賛を避ける事に志向している。4行目の「モテたことない」に対して「一回も」を付け足すことにより、否定の強調を行っている。さらに、7行目は6行目のKASにオーバーラップする形での発話であるために、2度目の「一回も」でさらに声を大きくし、KASの発話に打ち勝つ形となっている。

次に「下方修正」及び「言及点の変更」の例を検討する。

(3.20) [ILO-KAS-MIA、02:19-02:25、料理上手い]

- 01 MIA : だって料理上手いじゃん。
02 KAS : そうだ[よ。
03 ILO : [いやそれさ:家でやる程度で店出せるもんじゃ。ないからね。

(3.20)も(3.19)同様に筆者のデータである。まず、1行目以前の発話として、就職活動をしていないILOに対してMIAがレストランを出すことを提案している。そして1行目で、MIAが「料理上手い」とILOを褒める第一成分を発話している。次に2行目で、KASがMIAの褒めに同調する。しか

し、3行目で ILO は KAS の発話の最後にオーバーラップさせながら非同意の発話を行っている。3行目の ILO の発話は MIA の「料理上手いじゃん」について直接言及せず、「店出せない」という直前の連鎖の内容に言及点を移して返答していることが観察できる。さらに、ILO は料理は「家でやる程度」とし、MIA の「料理上手い」という褒めを直接受け入れず、下方修正して一部受け入れ、自賛を最小限に抑えた。このように、Pomerantz が示した4つの解決法は2つ以上同時に観察される場合もある。

次に「褒め返し」の例を検討する。以下の例(3.21)はEの褒めに対して、Gは「Great」と褒めを受け入れる発話をするが、直後に「so are you」と続け、Eを褒め返している様子が観察された。この褒め返しについて金(2012)は会話参加者の関係が褒める側と褒められる側、言い換えれば評価する者と評価される者という不均衡な関係になってしまう恐れがあるため、一時的に生じた不均衡な関係を元に戻すために、相手への褒め返しを行っているのではないかと述べた。

(3.21) [(Schegloff, 2007, 16-19)]

01 E: Yer lookin' good.

02 G: Great, so are you.

以上のように、Pomerantz は褒めのシークエンスにおける回答は、優先性の高い同意と自賛の回避を同時に満たすように構成されると結論付けた。

3.8. 自己卑下についての優先性

3章7節において、褒めのシークエンスでは第二成分発話者が自賛を回避するように導くことが優先性の高い行為であり、優先性の理論の例外であると論じた。Pomerantz (1984)によると、自己卑下も同様に、自己卑下の第一成分に対して非同意の第二成分が優先性が高く、同意の第二成分が優先性が低い発話である。Pomerantz によると、自己卑下に対して非同意を表明する手法は以下の3点である。

1. 一部を繰り返す
2. 否定
3. 褒め

さらに、否定の後に言及点や話題の変更が続く様子も観察された。次の(3.22)は自己卑下の第一成分中に現れた言葉を、第二成分話者が一部を引用して繰り返す例である。

(3.22) [(Pomerantz, 1984, 83) AP;fn]

- 01 L: You're not bored(huh)?
 02→S: Bored?=
 03 =No.We're fascinated.

次の(3.23)は、否定であり、英語の場合”no”や”hum-mh”、”not”が頻繁に用いられる。さらに”no”が用いられる際には発話順番内の最初に”no”を発話することが多い。

(3.23) [(Pomerantz, 1984, 84) JG:2]

- 01 R: Did she get my card.
 02 C: Yeah she gotcher card.
 03→R: Did she t'ink it was terrible.
 04→C: No she thought it was very adorable

次に、自己卑下に対する第二成分発話が褒めである場合が以下である。Pomerantzによると、自己卑下が評価の一種であることから、評価のシークエンスの延長上に褒めが現れやすくなるとのことだ。

(3.24) [(Pomerantz, 1984, 85) SBL:2.2.3.-15]

- 01 A: I mean I feel good when I'm playing with her because
 02 I feel like uh her and I play alike hehh
 03→B: No.You play beautifully.

さらに、Pomerantz は自己卑下を最低限否定した後に、言及点の変更や話題の変更が見られるとした。以下の(3.25)は言及点を変更した第二成分で、(3.26)は話題の変更をした第二成分の例である。

(3.25) [(Pomerantz, 1984, 86) SBL:2.2.3.-10]

- 01 B: And uh that poor li'l Gladys she, know she
 02 never did get it right about where she played
 03 A: hh
 04 B: She was heh!
 05 A: She was almost as bad [as I was.
 06 B: [heheh
 07→ [No, but she]=
 08 A: [heh heh hehheh]=
 09→B: =[even up to the last one, they practically=
 10 A: =[heh heh
 11 B: =hadtuh th(h)row her outta that [first ta(hhh)ble .heh heh
 12 A: [.heh .heh heh heh heh heh

(3.25)では5行目でAが「she was almost as bad as I was」と自己卑下の第一成分を発話する。それを受けたBは7行目で発話順番内の最初に「no」のみを発話し、最低限の否定を行う。そして、直後に「but」を発話し、言及点をA個人だけでなく所属団体へ変更している。

(3.26) [(Pomerantz, 1984, 86) fn]

- 01 C: I'm talking nonsense now

02 A: No.:

03 but I think I'm ready for dinner anyway.

(3.26)では、1行目でCが自己卑下の第一成分を発話するが、2行目でAが発話順番内の最初に「no」を発話し、最低限の否定を行う。しかし直後に「but」を用いて自己卑下とは全く別の話題へと変更する様子が観察できる。

上記のいかなる例においても、第二成分発話はその発話順番内で遅延が生じておらず、発話の緩和や理由付けも観察されない。これらの特徴が、自己卑下における優先性の高い発話である。さらにポメラantzは、自己卑下を受けた第二成分発話までになんらかの遅延が生じた場合には、それは優先性の低い同意の証拠として扱われると述べている。

(3.27) [Pomerantz, 1984, 91-92]

01 W: Do you know what I was all that time?

02 L: (no.)

03→W: Pavlov's dog.

04→ (2.0)

05→L: (I suppose.)

(3.27)において、3行目でWが「パブロフの犬のようであった」と自己卑下の第一成分を発話する。それに続いて、4行目で否定などの自己卑下のシークエンスにおける優先性の高い発話行為が起こることが予想されたが、4行目で観察されるのは2秒間の沈黙である。この沈黙は自己卑下に対する同意の予兆であり、5行目で実際にLから「そうだね」という、Wの自己卑下を認める第二成分が発された。

また、岩田(2014)は就労支援のカウンセリングにおける自己卑下への第二成分として、支援者が非同意を示さず、すぐに自己卑下の理由や根拠を示すよう求める現象が観察されるとした。

(3.28) [(岩田、2014、150-151) ダメ人間]

- 01 SP: でもそれだけいろいろやって↑る↓からだから(0.2)次も見つかりそうな
 02 気がするけど
 03 CL: ん: : :
 04 SP: .h なんかあんの めぼしいのとか 今見てて
 05 (..)
 06 SP: まあそんな見てないか
 07→CL: 見てないですけど(.).hh な: : んかフリーターのだ- なんていう
 08→ フリーターっていうか だめ人間のだめパターンに入ってる↑気: ↓し
 09→ かしらないんですよ
 10→SP: え ど- ど- どんな: ?
 11→CL: なんか(.)短い仕事見つけてはやめ見つけてはやめ(みた: いな).hh
 12 SP: う: ん
 13 (0.2)
 14→CL: .h なんか(.)あ(h)りがちのだめ人間パターンに入って(.)る: .h
 15→SP: えっ>ど- どういうとこだめ- だめ人間だと思(う)の)

(3.28)では、SPが支援者でCLは利用者である。7行目でCLが「フリーター」という定職についていない者として否定的な響きの単語を用いて自己卑下を開始し、さらに8行目でフリーターという言葉で人間そのものの素質を否定する「だめ人間」と変更し、自己卑下を上方修正(upgrade)する。それを受けてSPが10行目で「どんな?」という自己卑下に対する第二成分を発話する。さらに、その答えとして14行目でCLが自己卑下で返答し、15行目でSPが再び「どういうとこだめ人間だと思(う)の」と根拠の要求を行っている。

岩田(2014)は、(3.28)に見られるような支援者が自己卑下の後に遅延も言い淀みも無くすぐに質問をするという行為は、優先的である非同意を志向した行為と考えられるとしている。何故なら、本来すぐに非同意すべき

位置で、まずなぜ利用者がそう思うのか質問し、探り出した根拠が客観的にみて妥当ではないことを確認できるためであるとした。さらに岩田は、支援者は自己卑下の発話を、その問題解決のための情報収集の機会を作るきっかけとして利用しているために起こる発話デザインであるとした。

さらに、自己卑下は冗談を発話する際にも用いられる。職場での自己卑下を含んだ冗談について論じた Schnurr & Chan (2011)は、第二成分発話者による笑いには、第一成分発話がシリアスなものではなく冗談であることと捉えたことを示す機能があるとした。

(3.29) [Schnurr & Chan, 2011, 30]

((During a job interview at A&B Resolutionz. Donald, the company's CEO, and Ann, a project manager, are interviewing Michael, a potential new employee.))

01 Donald: things are looking like this year will probably be
 02 our best year ever
 03 um but it does come on the back of you know
 04 fairly tight fairly lean times
 05 we're just now
 06 there's four main shareholders um so it's you know
 07 it's however deep our pockets are and
 08 you can see the quality of my suit [laughs]
 09 Michael: [laughs]
 10 Ann: he's got shoes on so he must be having [a good day]
 11 Donald: [laughs]
 12 Oh yes we try and run a relaxed atmosphere [laughs]

(3.29)では、1行目から8行目まで Donald が自らが CEO を務める IT 会社の成功を控えめに語ると共に、自分の CEO としての権力と立場をひけらかさずに自己卑下を含んだ冗談として Michael と Ann に伝えている。この

Donald の行為は、プロジェクトマネージャーとして会社で高い地位にいると考えられる Ann と、近い将来会社の一員になると考えられる Michael に対する、一致と調和の役割 (rapport) に志向したものである。さらに、この Donald の発話は自分の部下である Ann がプロジェクトマネージャーとして IT 会社を成功に導いた活躍を脅かし、その功績を最小限に抑えるという点で自己認識の面目 (identity face) と地位の権利 (association rights) を脅かす恐れがある。それに対して未だ IT 会社の一員ではない Michael は 9 行目において、最小限の笑いで Donald に反応することが最も安全であると判断している。この笑いは、同意を示すための笑いというよりは、Donald の冗談を理解したことを示すものであると同時に、Donald の一致と調和の役割への志向を理解したことを表す働きがある。

続いて 10 行目で Ann は Donald をからかう発話をする。この発話は一見 Donald の自己認識の面目 (identity face) を脅かすことになりかねないが、11 行の Donald の笑いを含んだ反応から、Donald は Ann のからかいを同僚としての関係と友情の増強として理解したことが分かる。Sacks (1974) は冗談の発話に対する最も適切な反応は笑いであると論じたが、実際には冗談を発話する人物の地位や、それに反応する人物との関係性によって様々で、一様に笑いだけが冗談に対する十分な反応であるとは限らないと言える。

第 4 章 日本語と韓国語の褒めと自己卑下

第 4 章では、日本語と韓国語の褒めと自己卑下についてまとめる。金 (2012) は、褒めの第一成分発話における日韓の相違点について 3 点の特徴をまとめた。まず、韓国語の方が日本語より、評価語を用いる褒めの割合は少ないものの、評価語の種類は日本語より多く、多彩な褒め言葉が用いられていると論じた。褒めに現れやすい形容詞の数は日本語が 17 語 (e.g., いい, すごい, かわいい) に対して韓国語は 32 個 (e.g., 예쁘다(きれいだ), 잘+동사(よく+動詞), 좋다(良い)) であった。

2 つ目に金は、日本語では遂行や行動を褒める表現 (e. g., 「大学受験に

成功した」「アルバイト頑張っている」)が多いのに対して、韓国語では外見を対象として評価する表現(e. g., 「色白だ」「目が魅力的だ」)が非常に多く見られるとした。日本語において「外見」への褒めの出現頻度が低いのは、「外見」が会話の話題として選択されるのが韓国語に比べて少ないことが考えられるという。これは、日本語では外見以外を対象にすることに比べ「外見」を話題にして褒めることは相手への負担が大きく、できるだけ触れないように配慮するのが日本語母語話者にとってのポライトネス・ストラテジーになっているためであろう。その一方で韓国社会では、「外見」に関心を示す話題が多く、それを積極的に褒めるというポライトネス・ストラテジーが優先されると解釈できると述べた。

3つ目に金は、日本語の褒めの第一成分は肯定的評価語だけを用いて具体的な根拠などはあまり述べない場合が多く、これは褒めの第一成分発話者が聞き手の自分の領域に立ち入られたくないという欲求を脅かさないように配慮した結果であるとした。その一方で、韓国語の褒めの第一成分はより具体的な説明を行い、自分の褒めが誠意のあるものであることを伝えることで自分の褒めを成功させる傾向があると示した。

次に金(2012)は、褒めの第二成分発話における日韓の相違点について以下の特徴を示した。日本語と韓国語の褒めの第二成分発話について「自賛の回避」や「複合」が多用されていると述べ、その割合に大きな日韓の差は認められないと論じた。金の述べる「複合」の第二成分とは、肯定や否定、回避の反応は常に1つが採用されるとは限らず、2つ以上が組み合わせられる反応だということである。また、「複合」の返答における最初の返答をいかにして変化させるのかに焦点を当てると日韓差が認められると述べた。複合の日韓差とは、日本語では最初の返答を否定的に変化させる傾向がある一方で、韓国語では最初の返答を強めたり裏付けるような無変化がより多く表れるとした。

次に、Kim (2014)は韓国語における否定疑問文を用いた独立した自問の発話「ani-nka?」の使用に見られる自己懐疑について論じた¹⁾。次の例(4.1)はペアワークに取り組む韓国語母語話者の学生S1とS2の会話である。

(4.1) [(Kim, 2014, 88) K02Tsk_97-99]

- 01 S1: ¥kyelkwuk-ey-nun cwuki-n ke ani-ya?¥
 Isn't it that he killed him in the end?
- 02 S2: ¥cengmal?¥
 Really?
- 03→S1: ¥ccikuleci-n ke ani-ya? ani-nka?¥
 Isn't it that he gets crushed? Isn't it?

(4.1)の3行目に見られる「ani-nka?」は一般的に自己卑下や自らの主張の断言を和らげたりする際に用いられる。(4.1)では1行目のS1の主張に対してS2が2行目で優先性の低い否定に近い疑問の反応をしている。それに対して自問の発話を示す「ani-nka?」を否定疑問文の後に追加することによってS1自身の認識の不確かさを強調して示している。このように韓国語では否定疑問文の「ani-nka?」を自己卑下的一种として用いるようだ。

次に Kim (2014)は、日本語母語話者同士の会話における自己卑下では、英語母語話者同士及び韓国語母語話者同士の会話に比べて自己卑下の発話をそのまま繰り返して同調する傾向が強いとされた。以下の(4.2)はペアワークに取り組む日本語母語話者の学生SとTの会話である。

(4.2) [(Kim, 2014, 90) J01Tsk_100-103]

- 01 S: kore-mo nangka yoku wakara-nai.
- 02 T: yoku wakara-nai.
- 03 S: hhhh

(4.2)は1行目でSが知識不足により課題が「分からない」と自己卑下の発話をする、続けてTもSの自己卑下をそのまま繰り返して自己卑下に同調する。さらにKimは(4.3)のような繰り返しの同調のシークエンスではしばしば笑いが追続すると述べた。また、Kimは日本語の自己卑下における

繰り返しによる同調は、互いを同じ水準に置き、互いの強い関係性を保つことに重要な役割を持つともした。

このように、日本語と韓国語の褒めと自己卑下は褒めや自己卑下の伝え方に違いが見られる一方で、その受け応えにはいくらか共通点も見られるようだ。

第5章 使用データ

使用データは全3種類で計170分、会話参加者の人数に限定はなく、2人会話が1点、3人会話が2点である。また、いずれのデータにも韓国語母語話者が1名以上と日本語母語話者が1名以上含まれている。また、会話参加者には録音・録画実施以前に、データ使用主旨についての同意を確認した上で、研究への参加同意書に署名をしてもらった。研究への参加許可書のサンプルは88ページに添付資料2として添えた。また、4種類のデータの詳細と、それぞれの会話参加者の情報を以下に表1として提示する。特記事項として会話参加者の情報を掲載したが、1章3節でSchegloff (1992)の相互行為外の背景情報と相互行為内の背景情報について述べたように、これらの情報を前提として分析はせず、あくまで動機無しの観察(unmotivated looking)を基本とする。

表 1 データ詳細及び会話参与者情報

データ名	録画日	会話参与者	特記事項
YUN-KEI-MIA	2012/07/17 日本	YUN	韓国語母語話者・ 日本語学習者(日本語能力検定1級)・ 交換留学生
		KEI	日本語母語話者・韓国語学習者
		MIA	日本語母語話者・韓国語学習者
HON-MIA	2013/12/06 韓国	HON	韓国語母語話者・ 日本語学習者(日本語能力検定3級)
		MIA	日本語母語話者・ 韓国語学習者(韓国語能力検定4級)・ 交換留学生
ILO-KAS-MIA	2014/05/01 日本	ILO	韓国語母語話者・ 日本語学習者(日本語能力検定1級)
		KAS	日本語母語話者・韓国語学習者・ 韓国に4か月交換留学経験
		MIA	日本語母語話者・ 韓国語学習者(韓国語能力検定4級)・ 韓国に10か月交換留学経験

第6章 褒めの連鎖

6章から、筆者が集めたデータに見られた褒めの連鎖(第一成分及び第二成分)を実際に観察して行く。

6.1. 褒めに対する自賛の回避の返答

先に述べたように、Pomerantz (1978)は褒めに対する第二成分として4点提示した。その中から初めに自賛の回避の第二成分発話を検討する。(6.1)では、MIAがILOを「モテル」と褒めの評価をする。それに対してILOは「モテたことない」とMIAの発話を否定し、自賛を回避する。(6.1)は第3章で(3.19)として提示した例である。

(6.1) [ILO-KAS-MIA, 39:10-39:18, ILOさんイケメン]

01→MIA: でも背高いからモテルでしょ. 韓国で.

02 (0.9)((ILO視線をそらす))

- 03→KAS : 。うん。
- 04→ILO : 。いや：す。いや俺モテたことね：わ。
- 05 (.)
- 06 KAS : でもほら[今まで別に-
- 07→ILO : [一回も、一回も。

まず 1 行目で、MIA が ILO を背が高いためにモテると評価している。MIA は褒めるための手段として、背が高いという見た目の事実を根拠としている。個人差はあるものの、日本や韓国において背の高い男性は女性にモテるという考えが一般的であるため、MIA は「もてるでしょ」と下降イントネーションの付加疑問文を用いて確信的に述べている。次に 2 行目では、0.9 秒の沈黙が生じている。褒めの連鎖では褒めの第一成分に対しては自賛を避ける否定が優先性が高く、褒めを認める同意は優先性が低い。この会話において ILO は 4 行目で自賛を避ける否定の発話をしており、これは優先性の高い行為である。しかし、2 行目において優先性の低い回答が生産されることの特徴である沈黙が 0.9 秒発生している。この沈黙は、1 行目で MIA が言い切りの断定の発話デザインを用いていることが関連していると思われる。ILO は褒められた事に対しては否定するという優先性の高い発話行為を取っている一方で、MIA の断定的に発された確認要求の付加疑問文に対しては完全に否定する、という優先性の低い行為を行っているため、遅延が生じているのではないかと考えられる。

そして 3 行目では、KAS が「うん」と、MIA の褒めに同意し、MIA と共に ILO を褒める共同発話者となっている。Pomerantz (1978) は、会話参加者が複数の場合、一人の参加者がもう一人の参加者を褒めると、そこにいる 3 人目の参加者もその褒めに同調するという現象が観察されるとした。次に 4 行目では、ILO が MIA の 1 行目の第一成分に対する隣接対の第二成分を発話している。ここでも 2 行目と同様に非同意の第二成分の直前に「いや：」という言い淀みの発話があり、優先性の低い発話行為の遅延が見られる。ここから、褒めに対する第二成分として自賛を避ける非同意が優先

性が高いと言うことに加えて、第一成分発話者の発話デザイン次第では、第二成分で非同意の発話行為を緩和させるデザインを採用することが観察された。最後に7行目においては、ILOは完全に1行目での褒めに対して自賛を避ける事に志向している。4行目の「モテたことない」に対して「一回も」を付け足すことにより、否定の強調を行っている。さらに、7行目は6行目のKASにオーバーラップする形での発話であるために、2度目の「一回も」でさらに声を大きくし、KASの発話に打ち勝つ形となっている。

6.2. 褒めに対する下方修正の返答及び言及点の変更

次に、褒めの第一成分に対して、会話参加者が第二成分として言及点の変更をする様子も観察された。その例が(6.2)、(6.3)、(6.4)である。下記の(6.2)では、ILOの冗談の発話をKASとMIAが褒め、それに対してILOが言及点を変更して返答する。

(6.2) [ILO-KAS-MIA, 08:30-09:31、アザラシ]

01 MIA : >なんか<¥飛行機取れなかった¥から泳いで来たの?

((14行省略))

15 ILO : [おれアザラシじゃね : ん[だから.

16 MIA : [あ(!!!!!!!!!!!!!!!!) ((手を叩く)). h

17 KAS : [!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!]

18 あ(HHH) ((手を叩く))

19→KAS : [いや、凄いい。 なな年[目ともなると

20 MIA : [(!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!) ((手を叩く))

21→KAS : [そこら辺のやつらとは-

22→MIA : [やっぱり違うも 習得してるね：.

23→KAS : 全然違うは そこら辺のやつらと[は(h).

24 MIA : [. hhh あ : (hh)¥アザラシって¥

25 KAS : °(hhh)°.

26 MIA : あたしアザラシって久しぶりに言ったわ：.

- 27 KAS : ¥う : ん. ¥
 28 (0.4)
 29 KAS : いないよたぶん. あのプサンら辺. =
 30 ILO : =(hh[hhh])
 31 MIA : [(HHHHHHHHH)]
 32→ILO : (>なにく)前さ : ニュースとかなんか荒川[あ=
 33 MIA : =うん. [タマちゃん タマちゃん.
 34→ILO : [¥なんかアザラシ[なんか変なアザラシ¥[(hhh)
 35 KAS : [タマちゃん [(hhh)
 36 MIA : [(hhh)
 37→ILO : 最近見てないけど.
 38 MIA : それね : 私が高校生のときだからね ; =
 39 ILO : =え そ : な[の?
 40 MIA : [来る前だよ.
 41 (1.5)
 42→ILO : [いやないないない. おれ結構-結構-にさんべん-
 43 KAS : [でも何回か さん回ぐらい.
 44→ILO : [にさんべん- う : ん.
 ((10行省略))
 54 KAS : 埼玉にもいたし : . [東京
 55→ILO : [>そりゃくあちこちいるもんね. =

(6.2)では、ILO が韓国の徴兵制度を終えた 2 日後に日本留学に来たという発話を受けて MIA が 1 行目で「泳いで来たの?」と冗談を交えて ILO に質問した。そして ILO が 15 行目で「アザラシじゃね : んだから」とさらに冗談を交えて返答した。これを受けて KAS が 19 行目において、「凄いい. 7 年目ともなると」と ILO を来日 7 年目の外国人とカテゴリー化して日本語能力を褒める評価をした。さらに、KAS は 21・23 行目において ILO 以外の外国人と比較して、ILO の日本語能力を上方修正して再褒めた。そして、MIA も 19

行目の KAS による ILO の日本語に言及点を当てた褒めに同調して 22 行目で「やっぱり違う。習得してるね:」と発話し、ILO の日本語能力に焦点を当てて褒めた。そして、24 行目から 29 行目まで KAS 及び MIA はアザラシという単語の言及機会やアザラシの存在希少性に言及して、褒めの発話とまでは行かないが、ILO の日本語能力を褒めるに至った裏付けを行った。

そして、一連の褒めを受けて ILO は 32・34 行目において「前さ: ニュースとかなんか荒川」「なんかアザラシ なんか変なアザラシ」と発話し始め、日本語能力を褒められたことを受けて、自分のアザラシの知識の出所を明らかにした。そして、37 行目において、「最近見てないけど」と発話し、KAS 及び MIA の言及機会や希少性への発話への同意を示した。そして、42 行目から「2、3 回(アザラシのニュースを)見た」と多発性に言及点を変更して日本語能力に対する褒めの第二成分を発話した。

次の例(6.3)では、MIA が YUN の所持物を褒め、YUN が言及点を変更して返答する。

(6.3) [YUN-KEI-MIA, 00:05-00:25、筆箱かわいい]

- 01→MIA : っていうかその筆箱すっごい可愛い。(YUN 筆箱落とす)あ↑は[: : .
(6 行省略))
- 03→MIA : °はいはい。°(.)これ.
- 04→KEI : ね。めっちゃおしゃれ[じゃない?
- 05→MIA : [¥なんかさ↑ : 画家みたい。¥ [hhhh
- 06→KEI : [h hhhh 分かる。
- 07→YUN : なんか私こんな(.)>なんか<古:(.)く見える?
- 08 MIA : あ : あ : あ : あ : あ : .
- 09→YUN : の好きで ; ,
- 10 MIA : あ : く - え [: : .
- 11→YUN : [°うん。°じょ-これジョンジュさんも(.)持つてるる
- 12 MIA : え↑[え
- 13 KEI : [↑へ : : : .

(6.3)は、データ収集者であるMIAがビデオ録画を開始した直後であり、1行目のMIAの発話がデータ内の最初の発話である。1行目の発話は「その筆箱すっごい可愛い」という机上にあるYUNの所持物への褒めであり、その直前の会話ではなくその発話をした時点における物質を含む会話環境をきっかけとして開始された連鎖であることがわかる。ここから、褒めの連鎖は何の前触れもなしに発話されることが可能であり、直前の発話連鎖が不必要な行為であることが分かる。

そして、1行目の発話の直後にYUNが筆箱を床に落としてしまう。3行目のMIAの「はいはい」はKEIと共にYUNの筆箱やその中身を拾って渡した後にYUNに「ありがとう」と感謝を述べられたことへの返答である。そして、続けて強調するように「これ」と発話し、YUNとKEIの視点や考えをYUNの筆箱へ戻した。そして4行目でKEIもMIAに同調し「ね、めっちゃおしゃれじゃない?」と否定疑問文を用いて褒めの発話を行った。さらに、MIAは5行目において「画家みたい」と発話し、「かわいい」という抽象的な評価に具体性を追加した。さらにKEIも6行目でMIAに同意した。

そして、その一連の褒めを受けて7・9行目においてYUNは「私古く見るの好き」と自分の好みについて言及点を変更する第二成分を発話した。さらに、11行目において「ジョンジュさんも持ってる」と、自分の筆箱が一般的によくあるものであるということを仄めかして、自賛を避けた。

次の抜粋(6.4)では、MIAがYUNの能力を褒めるが、YUNは褒められた能力が一般的なものであることを主張する、言及点の変更という手法で返答している。さらに、MIAの褒めは会話参与者であるKEIの賛同も得ることができず、結果としてMIAは褒めの評価を取り下げて、自己卑下を展開する。

(6.4) [YUN-KEI-MIA、30:03-30:51、エクセル]

01 MIA: ワードってつー あ ワードじゃない(.)エクセルって使う?

02 KEI: 使:えるけど: [日常は使わない.]

03 MIA: [あ 使えるんだ.(0.3)なんかね: こないだ: (0.3)]

- 04 あの：>私<時間割ね[.]ワードでまず表を自分で[作って]：
- 05 KEI : [°うん° [おうおう。
- 06 MIA : か->入れてるんだけど<=
- 07 KEI : =うんうん。
- 08 MIA : ゆ-な- こないだ YUN の：(0.5)つ- ちょっと時間割見てって
- 09 言われて見たときに：(.)YUN がエクセル使(h)って(h)た(h)[のね.それを.
- 10 KEI : [(hhhhhhhh)
- 11 MIA : (h)でなんか(h)：(.)>縦に-<月火：水木金=
- 12 KEI : =>うん[うん.<
- 13 MIA : [あ月火：>水木金<って-で：最後に：単位数が¥一番最後の>所<に
- 14 [こう()¥
- 15 KEI : [あ出るようになってんだ：(hhhh)
- 16 MIA : (h)月曜(h)日の(h)単位数(h)み(h)た(h)い(h)な(h)と数(h)字(h)が出(h)て(h)て。
- 17 KEI : ¥数式を入れて-¥
- 18→MIA : 凄い(hh[h]). 凄いと思って：(hh)
- 19 KEI : [(hhhh)
- 20→YUN : [え：普通：(0.3)しない？
- 21 MIA : ¥しない[：¥
- 22 KEI : [(hhhh)
- 23 MIA : 普通だってワードでいちいちちゃんとこ：.hひとマスふたマツ-ふたマス
- 24 [み(h)た(h)い(h)に(h)や(h)って(h)た(h)の(h)に(h)：い
- 25 KEI : [あ(HHHHHHH)
- 26 YUN : え そお？
- 27 MIA : (hhh)初(h)めて見た(hhhh)
- 28 KEI : (hhhh)
- 29 YUN : そうか：.
- 30→MIA : >なんか<それを普通にしてるってことが ほんとにす- 私はびっくり[して.
- 31 KEI : [あ：..
- 32→MIA : 私ที่ただ(.)あんまやんないからかもしんないけど：.

(6.4)では、MIAがYUNを対象とした褒めのシークエンスを開始する準備として、1行目において、KEIにエクセルという話題を導入して先行連鎖を開始する。そして、MIAは3行目から16行目まで、YUNを褒めるに至った経験を順を追ってKEIに報告する。そしてMIAは一連の語りの終了の指標としてYUNのエクセルを使う能力が「凄い」と褒める。

それを受けてYUNは20行目で「普通しない?」と発話し、MIAが褒めの対象としたYUNのエクセル能力を自分だけのものではなく、一般的なことであると表明する言及点を変更した返答をする。そして、YUNが「普通」と発話したことを受けてMIAは21行目で「しない」と強く非同意した。さらにMIAは23行目で、YUNの「普通」を再生し、「ワードを用いたマニュアル操作で表を作成すること」の一般性を裏付けとして再びYUNを褒めるに至った自分の認識を発話する。しかし、褒めの対象であるYUNだけでなく、会話参加者であるKEIからもMIAの褒めに対する同意が得られないことから、30行目で褒めの第一成分発話者であるMIAは、再び「普通」を繰り返して自らの認識と異なることを強調しながら「凄い」とYUNに対する再褒めを行おうとする。しかし、MIAは「す-」と語頭のみを発話して音を中断させ、「私は」と発話を続けた。「私は」を発話することで、今までMIAが一般的な視点から「エクセルを使える人は凄い」という褒めを行っていたが、これ以降は下方修正して、自分の認識で評価を行うことを示した。さらに、直前の「凄い」という評価を「びっくりした」という自分の感覚の表現へ言及点を変更する様子も見られる。従って、褒めの第一成分発話者が会話参加者(特に2人以上の会話における、褒めを受ける人物以外の会話参加者)から明確な褒めの同調が得られない場合、第一成分発話者は褒めの言及点を変更し、同意を得やすく発話をデザインし直すことが観察された。さらに(6.4)は、優先性の高さを求めた末に、褒めの評価自体を取り下げるといふ特徴が見られる。

しかし、MIAの「びっくりした」という感覚の表現を受けてもKEIは31行目で「あ：：」と同意とも非同意とも取れる曖昧な反応を示したため、

さらに MIA は下方修正を行い、32 行目で「私がただあんまやらないからかもしんないけど」と自己卑下を発話するに至った。ここから 32 行目も 30 行目と同様に、MIA は優先性の高い第二成分を得るために、下方修正を重ねて自己卑下を行ったと考えられる。

続く抜粋(6.5)(6.6)では、第二成分発話者は言及点の変更と共に褒めの下方修正の発話デザインを用いることがあることが観察された。次の(6.5)は MIA と KAS の褒めに対して、ILO は言及点の変更を手法として用いると共に、褒めを下方修正して一部受け入れている。(6.5)は第 3 章で(3.20)として提示した例である。

(6.5) [ILO-KAS-MIA、02:19-02:25、料理上手い]

01→MIA: だって料理上手いじゃん。

02→KAS: そうだ[よ。

03→ILO: [いやそれさ:家でやる程度で店出せるもんじゃ。ないからね。]

まず、1 行目以前の発話として、就職活動をしていない ILO に対して MIA がレストランを出すことを提案している。そして 1 行目で、MIA が「料理上手い」と提案の理由付けとして ILO を褒める第一成分を発話している。次に 2 行目で、KAS が MIA の褒めに同調する。しかし、3 行目で ILO は KAS の発話の最後にオーバーラップさせながら「いや」と非同意の発話を行っている。3 行目の ILO の発話は MIA の「料理上手いじゃん」について直接言及せず、「店出せない」という直前の連鎖の内容に言及点を移して返答していることが観察できる。さらに、ILO は料理は「家でやる程度」とし、MIA の「料理上手い」という褒めを直接受け入れず、下方修正して一部受け入れ、自賛を最小限に抑えた。このように、ポメラッツが示した 4 つの解決法は 2 つ以上同時に観察される場合もある。さらに初鹿野・岩田(2008)は、会話参加者が 3 人以上の場合、自分に対する褒めの放置は、他の会話参加者間で褒めが続くことを意味するため、あえて順番交替の規則(発話者は一時に一人)に違反して、発話を始めるとした。従って、ILO は 3 行目で

KAS にオーバーラップする形で発話を開始することで、自分が褒められたことを理解していることを示すことができると同時に、褒めを放置する人間でないことを示したと言える。ILO は 3 行目において「下方修正」及び「言及点の変更」という手段を採ることにより、第一成分発話者への優先性の低さを緩和させたと同時に、自賛を避けるという社会的に求められる反応も弁えていることを示そうとしたと考えられる。

次の例(6.6)では、MIA が数年前の ILO をイケメンと褒め、それに対して ILO は言及点の変更や下方修正で返答する。しかし、MIA は ILO の第二成分を自分の評価への非同意と認識し、当初の ILO への褒めをさらに上方修正して再褒めを行う。

(6.6) [ILO-KAS-MIA, 39:53-40:50, ILO さんイケメン]

01 KAS : ◦(hhh)◦え↑へ え↑へ 見[して:。(ILO 携帯電話を差し出す)]

02→MIA : [すごいイケメンでしょ]

03 (.)(KAS 携帯の写真を確認)

04 KAS : うえええええ

05→ILO : これ-これでも(.)ちょっと(.)太った.日本来て.

06→MIA : え: : : えでも:>でもこれくちょうどいい.ってゆうか そのシャツの

07 ピチピチぐあいみたいな.

08 KAS : え↑: : :

((20 行省略))

28 MIA : [え これさ:もおさ:]

29→ チャンミン((韓流アイドル))もビックリのイケメン具合だよ=

30→KAS : =うん.オッパ戻りなって.

お兄さん

31 MIA : うん.

32→ILO : じゃ[じゃ今年頑張る(から)さ:]

33 KAS : [>違う<モテないとかじゃないんだよ.[そ:そ:そ:]

34 ILO : [今年は頑張らないと

- 35 [だめだな。
 36 KAS : [努力努力. (hh)
 37 MIA : だってさ :
 38 KAS : やべ : . .
 39→MIA: やす- 私が言うのもなんだけどさ: 痩せればかつこいいの典型じゃない?=
 40→KAS : =うん. 確かに.
 41 (0.9) ((ILO 自分の携帯電話から視線を上げて MIA を見る))
 42→ILO : でもおれさ このあいだも あんまモテなかったもん.

(6.6)は、MIA が ILO の来日当時の写真がイケメンであるため、KAS に確認して欲しいと言ったことから始まり、ILO が実際に自分の携帯電話に保存してある写真を KAS に見せている場面である。1 行目で ILO が KAS に携帯電話を差し出すと、2 行目で MIA が KAS に向かって、「すごくイケメンでしょ」と確認要求の形で褒め、自分が以前その写真を見たことがあるため、同意(うん、はい等)を求める形での発話で褒めている。2 行目における MIA の発話は ILO を対象とした褒めであるが、発話の矛先は KAS である。2 人以上の会話においては、褒めの発話者は褒めの対象となる人物以外の会話参加者への報告や確認として間接的に褒めを伝えることができる。

次に、4 行目で KAS は大きな声で「うええええ」と発話し、写真を見た評価として驚きを表明した。次に、5 行目で ILO は、「これでもちょっと太った. 日本来て」と褒めをイケメンから体型に言及点を移した発話をした。さらに、「これでも」と発話することで、MIA がイケメンと評価する写真の時がイケメンであつとしても「少し太っていた時期」と下方修正した第二成分を発話し、自賛を最小限に抑えた。Stivers & Hayashi (2010)は、確認要求の第一成分に対して、4 つの第二成分が存在するとした。一つ目は、質問のタイプに合った返答 (Type-conforming response) で、「はい/いいえ」で断定的に返答する形である。二つ目は質問のタイプに直接は合っていない返答 (Direct nonconforming response) で、「第一成分の繰り返し」という返答の形である。三つ目は、質問のタイプに合っていない変化した返答

(Transformative nonconforming response)で、返答スタイルは多岐に渡る。この質問のタイプに合っていない変化した返答(Transformative nonconforming response)を(6.6)で見ると、2行目のMIAの「すごいイケメンでしょ」という確認要求に対して、ILOが5行目で「はい/いいえ」や「第一成分の繰り返し」という第二成分を採らず、言及点を変更した間接的な返答「これでもちょっと太った. 日本来て」という形を採っている。そして、四つ目は Stivers & Robinson (2006)の答えの不在(Non-answer response)であり、「I don't know/分からない」という返答の形である。

Stivers & Hayashi (2010)は、確認要求に対する4つの第二成分を直接的(Less oblique)であるものと間接的(More oblique)であるものに分類した。彼らによると、質問のタイプに合った返答(Type-conforming response)が最も直接的であり、それに次いで質問のタイプに直接は合っていない返答(Direct nonconforming response)が直接的である。さらに、答えの不在(Non-answer response)が最も間接的であり、それに次いで質問のタイプに合っていない変化した返答(Transformative nonconforming response)が間接的であるということだ。従って、(6.6)の5行目のILOの第二成分の返答は、MIAの褒めの第一成分に対して否定の第二成分を述べることへの、優先性の低さに意識を置いている発話デザインであると言える。

そして、ILOの言及点を体型に移した発話を受けて、MIAも6行目において、「でもこれちょうどいい」と発話し、イケメンから体型に言及点を変更して再褒めを行った。さらに29行目でMIAは、再び焦点をイケメンに戻してILOを再褒めした。そして、KASも30行目で「うん」とMIAの褒めに同調するが、直後に「オッパ戻りなって」と、やはり体型に焦点を当てた発話を続けた。それを受けたILOは32行目で「今年頑張る」と発話した。この発話における「頑張る」は、ILOが当時の写真がイケメンという褒めを暗に受け入れたダイエットの決意表明であり、5行目と同様に言及点の変更及び下方修正の手法を用いた褒めの第二成分であると言える。

(6.6)において注目すべきは褒めの第一成分発話者であるMIAが、自らの褒めの焦点である「イケメン」について明確にILOやKASから反応が得ら

れなかったことによる、褒めのやり直しである。3章6節で検討した(3.16)において、第一成分発話者の評価を第二成分発話者が下方修正した場合、第一成分発話者が当初の評価を上方修正して発話し直す発話が見られた。これは、確実な同意を得ることができなかった第一成分発話者が、優先性に志向してより優先性の高い上方修正の同意を追及していることが理由であると考えられる。(6.6)のMIAの行為も同様で、2行目の「イケメン」に焦点を当てた褒めは、ILOによって言及点を変更した下方修正の発話で返答された。そして、29行目において、「チャンミンもビックリのイケメン具合だよ」と、具体的に大衆的にイケメンと称される韓流アイドルの名前(チャンミン)を挙げて、2行目の抽象的な「イケメン」の評価に具体性を持たせて上方修正した褒めを再展開する様子が観察された。従って、褒めを受けた第二成分発話者は、自賛を避けることで生じる第一成分発話者への優先性の低さの配慮という点で、下方修正や言及点の変更という手法を取るが、結果的にこれらの手法を取っても第一成分発話者にとっては自分の評価に対して非同意を受けるという優先性の低い行為として受け取られることが分かった。

そして、39行目においてMIAは再褒めを始めるが、その言及点は明確な同意を得られない「イケメン」から、「痩せればかっこいいの典型じゃない?」と条件付き(痩せれば)の褒めとするのみならずILOの体型へ言及点を移した確認要求の発話に変化させている。さらに、MIAの発話は2行目と同様にILOへの褒めであるが、矛先はKASに向けられたもので、過去に写真を見たという経験に基づいた発話であるため、否定疑問文で同意(うん、はい等)を要求する発話デザインを採っている。これを受けたKASは、「うん、確かに」と発話し、「確かに」を加えることにより「イケメン」が焦点であった褒めの際よりも強い同意の発話をし、MIAの褒めに同調している。そして、ILOは42行目において「このあいだ(写真の当時)もあんまモテなかった」と自賛の回避をした第二成分を発話する。この42行目のILOの発話は、前述のStivers & Hayashi (2010)の確認要求に対する質問のタイプに合っていない変化した返答(Transformativ nonconforming response)であ

り、MIA の褒めの第一成分に対して否定の第二成分を述べることへの、優先性の低さに意識を置いている発話デザインである。

6.3. 家族を対象とした褒めの連鎖

ここでは家族を褒めの対象とした際のシークエンスを観察していく。次の(6.7)はKASが母親を褒めの対象とした発話をするシークエンスである。

(6.7) [ILO-KAS-MIA, 27:37-27:48, 父親がヤバい]

(KASが自分の父親が母親と同年にも関わらず、浪人と留年を重ねて母親より2年遅れて卒業したが、その直後に母親が妊娠して社会人一年目で父親になった話の続き)

01→KAS: お母さん偉いね[とか言って. 私だったら絶対無理とか言って,

02→MIA: [確かに.

03→KAS: 若気の至りなのよとか(h)言(h)[って(hh)

04 MIA: [え<お母さん>え じゃなくて,

05 (0.8)え 待って: ↑きゅうじゅうに年卒って凄最近じゃん.

(6.7)では、KASが自分の父親が母親と同年にも関わらず、浪人と留年を重ねて母より2年遅れで卒業したが、その直後に母親が妊娠して社会人一年目で父になった話の続きである。この直前直後の会話は7章4節の(7.8)において父親への家族卑下のシークエンスとして検討する。

まず、1行目でKASが「お母さん偉い」と家族を褒める発話をする。ここで注目する点は、「お母さん偉いね、とか言って」と引用マーカーである「とか言って」を語尾に追加している点である。KASは引用マーカーを用いることにより、KAS自身が「お母さん偉い」と褒めているのにも関わらず、他所から聞いてきた話のように会話参加者に伝えている。従って、身内を褒めることは好ましくないとされる中でも、伝聞形式を採用することによって、母親と自分に距離を持たせる発話デザインとすることができ、身内感を弱めることができる。そして、2行目でMIAは「確かに」と早い段階でKASの発話にオーバーラップさせながら強い同意の姿勢を示している。

さらに、1行目でKASは「私だったら絶対無理(社会人一年目の父親と子供を育てること)とか言って」と自己卑下を続ける。この時の発話にも引用マーカである「とか言って」が用いられているが、直前の発話で母親と自分に距離を持たせる引用マーカを用いたこととは異なる。ここでの引用マーカは文字通り、KASの記憶から引き出されている発話であることを示すものである。さらに、この自己卑下は「KAS自身は無理だが、KASの母親はできる」ということとなり、同時に母親の褒めにも繋がる。そして、3行目でKASは「若気の至りなのよ、とか言って」と母が自己卑下をした様子を引用マーカを用いて伝えている。これは、1行目で家族を褒める発話をするという、世間的に違反に近い行為をしたことを受けての発話ではないか。ここから、やはり家族を褒めることは好ましくないことであると認識されていることが観察でき、同時に第二成分発話者は容易に褒めに同意することができる様子も観察できた。

6.4. 褒めの連鎖における逸脱ケース

ここでは、褒めの逸脱ケース(deviant case)を検討する。2章7節において、褒めの第一成分に対する第二成分として自賛を避ける否定の第二成分が優先性の高い行為であると述べた。しかし以下の(6.8)では、KASがILOを対象とした褒めを開始するが、ILOは同意の第二成分を発話し、自賛の姿勢を示している。

(6.8) [ILO-KAS-MIA, 31:44-31:58、田舎住まいはダメ]

((日本にあるファストフード店における配達制度について話している))

- 01 ILO : それはくれる。>ちょっと<限定だけど、地域限定だけど。
 02 KAS : 。あ[: . 。
 03 MIA : [東京だから、東京だから。=
 04 ILO : [ケーエフシー-
 05 ケーエフシーとかもやってる- やってくれるよ
 06 (。)

- 07 MIA : まじ?=
 08 ILO : =うん.
 09 (1.0)
 10 MIA : だめだ. 田舎ずまいはだめだ.
 11 KAS : ◦だめだ.◦
 12 (1.0)
 13 MIA : へ[: : : .
 14→KAS : [◦まじか.◦よく知ってますね.
 15→ILO : ◦うん. >まあね.<◦
 16 (2.0)
 17 MIA : >えでもく私(.)頑張って電話したよ. ペダル.

配達

(6.8)では、ILO がファストフードの配達制度について経験を元にして話している。一方、KAS と MIA は配達制度について知らない、又は利用したことがない者として、質問や驚きの反応を示している。従って、この時点で ILO はファストフードの配達制度について知識がある者、KAS と MIA は知識がない者として明らかな相対する二つのカテゴリーが成立していると言える。そして、ILO の一連のファストフードの配達制度についての話が終了した時点で、KAS は 14 行目で「よく知ってますね」と ILO を褒める。それを受けた ILO は、自身が KAS と MIA より知識がある者として明らかであるために、否定する必要がないために、「うん. まあね」と同意(自賛)の第二成分を発話するに至ったと考えられる。

6.5. 褒めの連鎖についての考察

6 章において褒めの第一成分および第二成分について観察してきたが、5 節では観察されたことを踏まえて考察を展開していく。まず第一成分についての特徴として、褒めの第一成分発話者は褒めるに至った裏付けや理由を述べたり、褒めの表現を抽象的なものから具体的なものへと変化させる

ものにより、主観的な評価から客観的に褒めに値する事柄であることを示すことが観察された。

また、褒めや自己卑下の連鎖における第二成分の優先性として、非同意は優先性が高く、同意は優先性が低いことを3章7節で述べた。従って、褒めを受けた第二成分発話者は、非同意で返答することが優先されるべきであり、第一成分発話者は褒めに対する優先性の例外を無意識的に承知しているはずであるが、(6.6)で観察されたように、第一成分発話者は第二成分発話者の自賛を避ける返答を自分の評価に対して非同意を受けるという優先性の低い行為として受け取ることがあることが分かった。そして、第一成分発話者は優先性の高い反応を得ようとする過程で再褒めをオリジナルの褒めより上方修正(upgrade)させたり、オリジナルの褒めの焦点を変更して再褒めを行ったりする。さらに、(6.4)において(6.6)とは正反対の行動であるが、会話参与者から優先性の高い反応を得るために褒めを下方修正(downgrade)したり、結果として自己卑下の発話を付属させたりする様子も観察された。この、第一成分発話者が優先性の高い反応を求める対象は、第二成分発話者に限らず、他の会話参与者(2人以上の会話における、褒めを受ける人物以外の会話参与者)から明確な褒めの同調(同意)を得ることも含まれる。会話参与者から明確な褒めの同調を得られなかった場合、先述の上方修正(upgrade)や褒めの焦点の変更だけでなく、褒めの連鎖の取り下げや自己卑下を発話するに至る場合も観察された。

従って2人以上の会話における褒めを受ける人物以外の会話参与者からの褒めに対する同調は、褒めの連鎖において非常に重要な反応であることが分かる。さらに、2人以上の会話における褒めの第一成分の特徴として、褒めの第一成分発話者は、褒めの対象となる人物が会話に参加していても、それ以外の会話参与者への報告や確認要求として間接的に褒めを伝えることができることが分かった。

次に、褒めの対象が家族である場合の第一成分の特徴として、語尾に引用マーカーを追加している点が挙げられる。引用マーカーを用いることによって、例え第一成分発話者が家族を褒めたとしても、他所から聞いてき

た話のように会話参加者に伝えることができる。そして、身内を褒めることは好ましくないとされる中でも、伝聞形式を採用することによって、家族と自分に距離を持たせる発話デザインとすることができ、身内感を弱めることができる。しかし、家族を褒める発話の直後に家族を卑下する発話を続けていることから、家族を褒める発話をするという、世間的に違反に近い行為をしたという意識は引用マーカを用いた褒めであっても拭えないといえる。それに対して、家族を対象とした褒めを受けた第二成分発話者は、非常に早い段階でオーバーラップすることで強い同意を示すことから、家族の褒めに同意することが非常に容易な行為であることも観察できた。

次に褒めの第二成分について考察する。褒めの第二成分は Pomerantz (1978)の考察を参考に進めたが、筆者の所有データには「褒め返し」は観察されなかった。しかし、その他の「自賛の回避」や「下方修正」、「言及点の変更」は第二成分として観察され、これらは2つ以上が同時に第二成分発話の手法として用いられる様子も観察できた。

また、第二成分発話者は褒めが優先性の理論の例外であるにも関わらず、第一成分発話者の評価への非同意という行為に志向した第二成分発話をデザインしていることが観察できた。特に、(6.6)に見られた確認要求での褒めの第一成分に対して Stivers & Hayashi (2010)で観察されたような質問のタイプに合っていない変化した返答(Transformative nonconforming response)で間接的な非同意の第二成分デザインにすることで、非同意の第二成分を述べることへの優先性の低さに意識を置いているということが分かった。

さらに、会話参加者が2人以上であった場合、初鹿野・岩田(2008)は自分に対する褒めの放置は他の会話参加者間で褒めが続くことを意味するため、あえて順番交替の規則(発話者は一時に一人)に違反して、発話を始めるとした。初鹿野・岩田の観察通り本研究で用いた2人以上の会話において、第二成分発話者がオーバーラップして否定を発話する様子が観察された。

最後に褒めの逸脱ケース(deviant case)について考察する。褒めの第一成分に対して優先性の高い第二成分は褒めを否定することであるが、収集データ内では同意の第二成分も観察された。これは、褒めの第一成分が発話されるより前のシーケンスにおいて、第二成分発話者が第一成分発話者よりも褒めの対象に対する知識が豊富な者として明らかであるために、否定する必要がないためであると考えられる。従って、褒めの対象について会話参与者間で最も優れていると自明であると判断した末の結果であると言える。

第7章 自己卑下の連鎖

7章から、筆者が集めたデータに見られた自己卑下の連鎖(第一成分及び第二成分)を実際に観察して行く。

7.1. 自己卑下に対する否定の返答

自己卑下の第一成分に対して、会話参加者が第二成分として否定をする行為が観察された。しかしこの否定は、自己卑下を真っ向から直接的に否定したものではなく、焦点をずらした発話で、曖昧さを持った否定である。その例が(7.1)及び(7.2)である。(7.1)ではMIAが自分のコートの臭さに言及した自己卑下を行っている。

(7.1) [HON-MIA、1-08:39-09:04、服が焼肉]

01 MIA : こうさ : 今さ : 授業寒くてさ : 途中で[こう着たのね、

02 HON : [。。うん。。

03 hh[hhh¥そうだね : ;¥

04→MIA : [そしたらさ(.)むわ[: : んってなった。分[かんなかった?

05→HON : [え そお? [>私<離れてて分かんなかった。

06 MIA : あほん[とに?

07 HON : [うんうん。

08→MIA : >ってかさ : <ハンソル-(人名) ハン s-ハン[ソルがさ : ;,

09 HON : [うんうんうん。

10→MIA : 私- 私焼肉のにおい今日するんだ[: >って言ってこうやってやったら<

11 HON : [うんうん。

12→MIA : ほんとだ : って言われた。 [hhhhhhhhhhhh

13 HON : [hhhhhhhhhhhh

14 MIA : あい[: : : ;

15→HON : [¥そうなんだ : . ¥>でもなんか<ハンソルは : そういう所にちょっと 16

→ 敏感だから[: . (.)そういう所<

17 MIA : [あ : においに? =

18 HON : =>うんうん.<[においに。そんな所が、

(7.1)において、1行目以前で、MIAは日本から来た友人と昼食に焼肉を食べたという話しをしていた。そして、4行目において、MIAは自分の所持物であるコートから焼肉の臭いがしたと、自分の所持物の卑下を行った。それを受けたHONは5行目で「え そお?」「私離れていて分からなかった」という否定の発話で、優先性の高い否定の行為をした。しかし、これらHONの発話は、MIAの自己卑下を真っ向から否定した「全然臭くない」などの断定的なものではなく、MIAのコート自体の臭いには触れずに、授業中の席の配置に言及した曖昧さの残る第二成分の発話である。

次に8行目においてMIAは、授業中の席で隣にいたハンソルには、自身のコートが臭いと認められたことを持ち出し、さらに自己卑下を確定的にして、再展開した。それを受けたHONは、15行目で「そうなんだ:」と発話し、一旦MIAの自己卑下の再展開を認めた。さらに続けてHONは、MIAのコートを臭いと言ったハンソルに言及の焦点を当てて、ハンソルは臭いに敏感な人であるため、コートを臭いと言われても仕方がないということを含意した発話を行った。このように、一度優先性の高い、自己卑下を否定する発話をしたにも関わらず、再度自己卑下を展開された場合には、自己卑下自体は認めるものの、周辺情報を追加して、自己卑下の第一成分発話者の失態ではないことを含意した発話をする場合が多い。(7.1)においては、MIAのコートが臭いという自己卑下に対して、HONが一度暗に否定したにも関わらず、MIAが自己卑下を再展開したことを受けて、HONはコートが臭いことは否定せずに、コートが臭いと言ったハンソルに言及し、コートが臭いのはMIAの失態ではないことを含んだ発話を行ったと言える。

次の(7.2)も、(7.1)同様に自己卑下の第一成分に対して曖昧さを伴う否定の第二成分の例である。ここではHONが自分の容姿に関する自己卑下を行う。

(7.2) [HON-MIA、1-02:11-03:00、黒くて不細工・田舎者]

- 01 HON : つつ : か>なんか<色白 : (.)好きじゃないか(h)ら(h).
- 02 MIA : 白いじゃん.<自分.(hhhh [hhhh hhhh])
- 03 HON : [(hhhh)ね(hh)>なんか<私も : 実は : >[なんか<
- 04 MIA : [うん.°
- 05→HON : もっと(1.0)>なんか<黒くしたいんだけど[:
- 06 MIA : [うん.
- 07→HON : ただ : なんか(0.4)黒くしたら[:
- 08 MIA : [うん.
- 09→HON : ただの<黒くて>不細工になっちゃうんだから(h) : (hhhh)
- 10→MIA : (hhhh)>いやいやいやいやいややく. .h>[えじゃない<
- 11 HON : [()]
- 12 MIA : 機会があつたらこう や- 焼こうと思う?
- 13 (0.8)
- 14 HON : と 思ったんだけど[: ,
- 15 MIA : [うん.
- 16 HON : >なんか<(.)かえ- 顔の方が>[ちょっと<濃ゆい方>だったくら[:
- 17 MIA : [うん. [うん.
- 18 HON : そうしたかも知れない[よね : うん. うん.=
- 19 MIA : [あ : あ : あ : .>確かに確かに.<
- 20 HON : =でも全然[(.)¥そうじゃないから.今のままでいいよ.¥
- 21 MIA : [(hhhh)
- 22 あ : 確かに.[でも : (.)白い方が似合うかも.
- 23 HON : [う : ん.
- 24 >うんうんうん[うんうん<
- 25 MIA : [>なんか<黒く : [.h ま : でも黒くしたら :
- 26 HON : [え : でも
- 27 MIA : >ま でも<健康そうには見える[けど : ,
- 28 HON : [あ そうだね.

- 29→ >なんか<田舎者に[見(h)え(h)る(h)]. (と 言いそう)
- 30→MIA : [あ(hh) : う(h)っ(h) そ(h) : .いやいや(h)いやいや(h)
- 31→HON : いや : も : 実際田舎者だ(h)し(h) : [(hhh)
- 32→MIA : [いや(h) : (h)¥あ : 南の方から?¥
- 33 HON : >うんうんうんうんうん.<ま : 全然関係ないんだけど : .

(7.2)において、1行目でHONは「色白が好きではない」という発話をしており、それに対して、2行目でMIAは「HON自身が色白であることを指摘している。それに対してHONは「自分自身も(肌を)黒くしたいが、黒くしたらただの不細工になる」と自己卑下を行っている。この自己卑下を受けてMIAは10行目で「いやいやいやいやいやいや」と優先性の高い否定の発話をする。しかし、(7.1)と同様に、HONの「黒くしたら不細工」という発話に対して、真っ向から否定した「黒くしたら似合う」や「黒くしたら素敵」などの発話ではなく、「いやいやいやいやいやいや」という具体的な発話を続けられない発話を行っている。つまり、ここでのMIAの発話は何を否定したのかをはっきりさせないデザインになっているのである。

次に、29行目でHONは「(肌を)黒くしたら田舎者に見える」と再び自己卑下を始め、それに対してMIAは30行目で「あ、ウソ : 」と笑い声を伴って発話する。この「ウソ : 」はMIAがHONの主張への信憑性の疑いを示しているが、笑いを伴うことで、強い疑いを示すことを避けている。さらに、これに続けてMIAは「いやいやいやいや」と曖昧さのある否定の返答を行なう。しかし、さらにHONは「実際田舎者だし」という変え難い事実である出身地を持ち出し、自己卑下を強めた。これを受けたMIAは、「南の方から?」と発話し、ソウル出身者でないことを認める発話をした。

(7.1)及び(7.2)に見られるように、第一成分として自己卑下の発話が来た場合、第二成分として焦点をずらすことや曖昧さを含む否定の第二成分で返答するが、再び自己卑下が発されたり、最初の自己卑下を強める発話が発された場合は、それを否定するのではなく、一部を認めることに志向した発話が第二成分として頻繁に観察された。これは、自己卑下の対象は、

他でもなく第一成分発話者に帰属したものであり、その対象を最もよく知る者が第一成分発話者であることと関連しているからである可能性がある。従って、自己卑下の一部容認は優先性の高い否定の第二成分で返答することが優先性が高い一方、対象物の帰属が第一成分発話者であるという事実には逆らえないという、葛藤の末の発話デザインであると考えられる。

7.2. 自己卑下に対する自身の類似体験談

自己卑下の第一成分に対して、会話参加者が第二成分として否定をした後に、続けて自身の同様の体験を語る例も観察された。(7.3)ではMIAが自分の洋服に対する自己卑下を行っている。

(7.3) [HON-MIA、1-04:23-05:37、袖が短くなった]

01 MIA : でもね[これをね[, これね : 洗濯したらね : =

02 HON : [↑ん? [うん.

03 HON : =うん.

04 MIA : ここ短くなっちゃった[こ(h)れ(h)く(h)ら(h)い(hhhhhhh)

05 HON : [((手を叩く)) (hhhhh)

06→MIA : .h .h ¥めっちゃ恥ずかしいんだけど[これ : .¥ (hhhhh)

07 HON : [えい

08→HON : でも>なんかくもともとそおっばい. [(hhh)

09 MIA : [¥ねね¥()¥

10 HON : [¥見える : .¥

((51行省略))

61 MIA : [え(0.3)私初めて- 初めてじじ- 縮んだ 洋服.

62 HON : え え(.) そうなんだ : .

63 MIA : 今まで縮んだことなかった : .

64→HON : なんか私も : 今までなかったんだけど [:

65 MIA : [うん.

66→HON : >なんかくちよおどこの前 ネットショップで買った(h)ら

67 ◦そ(h)れ(h)が(h)◦

68 MIA : 縮[んだ?]

69→HON : [めっちゃ縮んで :

(7.3)において、1行目以前ではMIAとHONの腕の黒さを実際に腕を突き合わせて比べており、その際にMIAは自身のカーディガンの袖に目が行き、袖を引っ張る仕草をしていた。そして、4行目でMIAは自分の所有物であるカーディガンの袖が縮んだという事実の報告を開始する。その報告には「Vてしまう」の文型を用いて残念な感情を表すなど、自分では予期していなかった状態に陥った事を表す表現が含まれている。また、笑いを含めて語ることにより、MIAがこの事実を笑い話として捉えていることも示している。続いて5行目で、MIAの発話に笑いが含まれていたことから、HONも笑うという行為でMIAの発話が笑い話であることを認識したことを示す。そして、6行目においてMIAは4行目の事実を背景として、恥ずかしいというマイナスの感情を加えて、自らの所有物を対象とした自己卑下を行う。それを受けたHONは8行目で、MIAの自己卑下に対しての第二成分として「もともと袖が短いものっぽい」と発話し、MIAの自己卑下を否定するという優先性の高い行為を行う。この発話はMIAの自己卑下を真っ向から否定した「全然恥ずかしくない」などの断定的なものではなく、「もともとそおっぽい」と、MIAがカーディガンを縮めてしまったことについて直接触れずに焦点をずらした発話をしている。さらに、直前の「なんか」については、飯尾(2006)は、節中に弱く挿入される「なんか」は、主につなぎ語(filler)の役割をしたり、発話を和らげる役割(softener)すると論じている。さらに、飯尾は特に和らげる役目としての「なんか」の使用は、若い女性の話し言葉の特徴の一つを表していると述べている。また、米川(1996)は、若者語の機能の一つに緩衝機能があるとし、これは、相手の感情を害したり傷つけたりするのを避けて、相手への印象を和らげることに志向することであるとしている。8行目のHONの「なんか」も非常に早い口調で、無意識に挿入されたような発話として聞き取れることから、飯尾(2006)の

発話を和らげる役割に当たるものと判断される。従って、8行目のHONの発話は、発話を和らげる役割の「なんか」及び焦点をずらした発話で、曖昧さを残した第二成分であると言えるだろう。

次に、65行目において、HONはMIAの袖が縮んだという自己卑下を受けて、自らの同様の体験を語り始める。ここでは、MIAの自己卑下の行為を緩和させるために、HONは自分自身も同様の体験をしたことがあり、普通に起こり得ることであることを示していると捉えられる。4行目においてMIAが笑いを含めて発話しているが、笑いは何か普通ではないことが起きたことを語る際に現れやすく、この例ではMIAは自分の袖が縮んだ体験を普通ではなく、恥じるべき体験であると認識していることが分かる。そこで、HONはそれを否定すると同時に、同様の体験を展開することによって、MIAを恥ずかしい状態から、普通の状態へ引き上げてやる効果があると考えられる。

7.3. 自己卑下に対する同調の返答

自己卑下の第一成分に対して、会話参加者が第二成分として同調する様子も観察された。その例が(7.4)、(7.5)及び(7.6)である。(7.4)では、MIAの自己卑下に対してKEIが自己卑下に含まれる発話を繰り返すことで同調し、最後に笑い声が発生する例である。

(7.4) [YUN-KEI-MIA, 09:50-09:57, 細いも太いも悩み]

((YUNと同じ学校から来たもう一人の韓国人男性交換留学生は細くて太れないことが悩みであると言っていたことを話していた))

01 KEI: かわ[いそうだな:. hhhhhh

02→MIA: [かわいそうだよね.<それはそれでね.(.)¥これはこれで

03→ かわい[そうだけど それはそれでかわいそうだよね.¥hh

04→KEI: [>か(h)わ(h)い(h)そ(h)う.(h)<私もだよね:. hh

05 あ: :.

(7.4)において、1行目以前はYUNと同じ学校から来たもう一人の韓国人男性交換留學生が細すぎるといふ話をしていた。YUNとMIAは韓国人男性交換留學生と面識があり、YUNとMIA主導で彼が細すぎるといふ話を進めており、KEIが評価として1行目で「かわいそうだな:」といふ発話をした。続く2・3行目でMIAが「これはこれでかわいそうだけど、それはそれでかわいそうだよね」といふ発話をしている。「これ」といふ発話と同時にMIAは左手で自分自身を指さしており、「それ」といふ発話の際には自分自身を指さしていた手をそのまま外側に向け、その場にはいない韓国人男性交換留學生を指さすようなジェスチャーをしている。従って、太れないことが悩みである韓国人男性交換留學生がかわいそうであることと対比させて、太っている自分自身の体型もかわいそうであるといふ自己卑下の発話をしていると分かる。ここから、自己卑下の発話は何の脈略もなしに発生するものではなく、前の文脈を受けた行為であることが分かる。

次に2・3行目の自己卑下の第一成分を受けて、4行目でKEIは「かわいそう。私もだよね:」といふ発話を両手で自分自身を指さしながら行っている。Kim (2014)は、日本語母語話者同士の会話における自己卑下では、英語母語話者同士及び韓国語母語話者同士の会話に比べて自己卑下の発話をそのまま繰り返して同調する傾向が強いとした。さらに、繰り返しを用いた同調の後の多くには笑い声が含まれることも論じた。また、日本語の自己卑下における繰り返しによる同調は、互いを同じ水準に置き、互いの強い関係性を保つことに重要な役割を持つとした。(7.4)も同様で、KEIは「かわいそう」といふMIAの自己卑下に含まれる発話を繰り返すことで同調し、最後に笑い声が発生している様子が観察できる。同様に次の抜粋(7.5)でも、MIAの自己卑下に対してKEIが自己卑下に含まれる発話を繰り返すことで同調し、最後に笑い声が発生している様子が見られる。

(7.5) [YUN-KEI-MIA, 11:26-11:37、耳が痛い]

01 YUN: も: ダイエットほんとに厳しかった。

02→MIA: hhh 耳が痛い。

- 03→KEI : 耳が痛い.
- 04 MIA : hhh[hh
- 05 KEI : [hhh あっち行ったら(.)チムヂルバン通おうと思って、
大衆サウナ
- 06 MIA : あ : . . =
- 07 KEI : =週にいち に回くらい.
- 08 MIA : あれで痩せるの?

(7.5)において、1行目のYUNの発話の前に、YUNが数年前にダイエットに成功した話を語った。そして、一連の体験談のまとめとして1行目の「ダイエットほんとに厳しかった」という発話をする。それを聞いたMIAは2行目で「耳が痛い」と発話する。「耳が痛い」とは、他人の発言・批評などが自分の弱点をついているので聞くのがつらいことを指す慣用句である。従って、2行目のMIAはYUNの一連のダイエット成功談とその評価が自分の弱点をついていることを示し、自己卑下を行っていると言える。さらに、2行目のMIAの自己卑下は、1行目以前のYUNの体験談を受けての反応であり、MIAがYUNの体験談をどう受け取ったかを示す理解表明でもある。この理解表明は、同時にYUNの体験談の終了を含んでおり、次の行為への移行を示している。実際に5行目から韓国留学予定のKEIが「チムヂルバン(大衆サウナ)に通おうと思っている」という予定の発話に移行している様子が観察できる。Golato (2005)は、褒めは連鎖を終える指標(compliments function as pre-closing to larger sequences)であると述べているが、(7.5)によって、本研究では自己卑下も連鎖を終える指標になり得ることが示された。

次に、2行目の自己卑下の第一成分を受けて、3行目でKEIが同調の第二成分である「耳が痛い」という発話をしている。ここでは(7.4)と同様に、第一成分の自己卑下を繰り返して同調する様子とその直後の笑いが観察できる。(7.4)と(7.5)は共通して、自己卑下の第一成分及びそれに対する返答の第二成分を日本語母語話者が行っている例であると言える。従って、

Kim (2014)の観察通り、日本語母語話者に繰り返しの同調がみられることが本データでも確認できた。

次の(7.6)も、自己卑下に対して繰り返しによる同調の第二成分が来る例であるが、最後に笑いは含まれない。(7.6)は第6章で(6.8)として提示した例である。

(7.6) [ILO-KAS-MIA, 31:44-31:58、田舎住まいはダメ]

((日本にあるファストフード店における配達制度について話している))

- 01 ILO : それはくれる.>ちょっと<限定だけど、地域限定だけど。
02 KAS : °あ[:.°
03 MIA : [東京だから、東京だから.=
04 ILO : [ケーエフシー-
05 ケーエフシーとかもやってる- やってくれるよ
06 (.)
07 MIA : まじ?=
08 ILO : =うん。
09 (1.0)
10→MIA : だめだ。田舎ずまいはだめだ。
11→KAS : °だめだ。°
12 (1.0)
13 MIA : へ[: : : .
14→KAS : [°まじか、°よく知ってますね。
15→ILO : °うん。>まあね.<°
16 (2.0)
17 MIA : >えでも<私(.)頑張って電話したよ。ペダル。

配達

(7.6)において、ILOがファストフードの配達制度について経験を元に話している。1行目でILOは配達可能地域が存在すると述べ、それを受けてMIA

が3行目で「東京だから.東京だから.」と発話し、配達制度を利用したことのあるILOが都会に住んでおり、配達制度を知らなかったMIA自身は田舎に住んでいると暗に示す。次に、10行目において、MIAはILOに対しての「東京だから.東京だから」という発話を自分に向けて「田舎ずまいはだめだ」と、自己卑下を開始する。すると、同じく配達制度を利用したことのないKASが11行目でMIAの自己卑下に含まれる「だめだ」の発話を繰り返すことで同調した。しかしながら、この直後に笑いは含まれず1秒の沈黙が観察された。ここから、上記(7.4)及び(7.5)とは異なり、この抜粋では直後に笑いが観察されずに、同調のみで反応が終了する場合も見られた。

次に、14行目でKASは「まじか」と配達制度への意外性を表明した後に、「よく知ってますね」と、ILOの知識に対して褒めの第一成分を発話する。Golato (2005)は、自己卑下は褒めを引き出す装置 (fishing for compliments) であるとしている。そこで示された会話例は以下の通りである。ドイツ語での会話を各行最下段において英語訳してある。

(7.7) [(Golato, 2005, 106) bissfest]

06→S: also brokkoli is gut bissfest.

well broccoli is good al dente.

well the broccoli is quite al dente.

07 (1.0)

08→S: °wenigstens das stück° das ich ebn [hatte°

°at least the piece that i just[had°

°at least the piece that i just[had°

09 B: [m'hm

[m'hm

[m'hm

10 U: das macht man so. gestern im

that makes one so. Yesterday in+the

that's how it's done. Yesterday in the

- 11 U: restaurant hatte ich ihn auch sehr(.)
 restaurant had i him also very(.)
 restaurant i also had it very much(.)
- 12 U: bissfest
 al dente
 al dente
- 13 A: mhm °das is weich°
 uhum °this is soft°
 uhuhm °this is soft°
- 14 (.)
- 15 ? : um hu
 um hu
 um hu
- 16→B: sehr gut häschen.haste gut ge[kocht].
very good rabbit.have+you good c[ooked
very good honey. You did [well

Golato (2005)が示した(7.7)では、Sが6・7行目において「ブロッコリーを軟らかく茹でてしまった」という自己卑下に対して、Bが16行目において「そんなことない。よくやったよ」と褒めることで返答している。この場合、Bが褒めた人物は自己卑下をした本人のSであり、自己卑下・褒めの対象は共通である。

一方、(7.6)を見ると、10行目で自己卑下を展開したのはMIAであるのに対して、14行目でKASが褒めたのはILOである。従って、褒めを引き出す装置である自己卑下は、自己卑下の第一成分発話者に対するものだけでなく、会話参与者全員が褒めの対象となり得ることが見られた。KASの褒めがILOを対象としたことについては、MIA及びKAS自身がファストフードの配達制度を知らない、又は利用したことがない者としてILOより知識がないことが明らかであるためだと考えられる。すなわち、ここではファ

ストフードの配達制度を知らない「田舎者」の MIA と KAS が一つのチームと配達制度を知っている「都会人」の ILO が対話していると捉えられる。さらに、15 行目の ILO の褒めに対する第二成分も、「うん、まあね」と褒めを受け入れる返答が現れている。これも、会話参与者 3 名の内、MIA 及び KAS の 2 名が知らない配達制度を ILO のみが知っていたという事実が明らかになったということを踏まえて、褒めを受け入れる第二成分を発話したものと捉えられる。15 行目の ILO の褒めを受け入れる発話については、褒めの連鎖における逸脱ケース (deviant case) として前章で検討した。

7.4. 家族を対象とした卑下の連鎖

今までは自己卑下や自分の持ち物卑下で、卑下の対象が自分自身であった。4 節では、家族を対象とした卑下を検討する。

(7.8) [ILO-KAS-MIA, 27:09-29:02、父親がヤバイ]

((KAS の両親は同い年で同じ大学を卒業している。しかし、KAS が実家に帰省した際に両親が卒業した大学のアルバムが 2 冊あることを発見した。))

- 01 KAS : ↑え なんでなんでつつたら いや(.)何 知ら- 知ってるでしょって
 02 　　って言われてうちのお父さん留年して浪人して-
 03 　　>浪人して留年してるから: , <
 04 MIA : うん.
 05 　　(1.0)
 06 KAS : な(h)んか きゅうじゅうに年卒なんだ(h)よって言われて
 07 　　>私くきゅうじゅうさん年の さん月生まれだから[: ,
 08 MIA : 〔確かに凄い早く
 09 　　生まれてるね=.
 10 KAS : =卒(h)業(h)してもう いち年後にもう [ベイビー
 11 ILO : 〔ふ: ん.
 12→KAS : 誕生してる。(h)って(h)いう。ヤ(h)バ(h)く (h) [ない?
 13→MIA : 〔え じゃ:

- 14→ お母さんがも：先に卒業したってことか。
- 15 KAS： お母さんはも：に年ぐらい社会人やって：，
- 16 (0.6)
- 17 KAS： 同い年だ[けど。
(15行省略))
- 32 私自分の結婚式出てるんですよ。親の。うちデキ婚だから：，
- 33 MIA： >あ そおなんだ.<
- 34 (1.0)
- 35 KAS： だから：そのと(h)しの：(.)秋ぐらい(.)違うな：.
- 36 >違う違う違う違う.<.h>でも<入籍したの いち月で>だから<卒業して
37 じゅっか月ぐらいで入-籍入れて にか月後にベイビーが生[まれて，
38 MIA： [あ：：：.
- 39 KAS： 披露宴はその(.)あとだから出てて：，=
40 MIA： =あ[：：：
- 41→KAS： [>みたいな.<えヤベ：>と思って.
- 42→MIA： >。確かに。<>なんか<=全部が最近のことだ[ね.
- 43 KAS： [うん.
- 44 だって(hh)卒業して次の日に子供養うとか無理だろ：みたいな.
- 45 MIA： 。確かにね：.。
- 46→KAS： や お父さんヤベ：こいつってマジで思(h)っ(h)た(h).
47 (0.5)
- 48→MIA： (hh)そ(h)れ(h)自(h)分の親(h)[じゃ(h)ん.
49 ILO： [(hhhhhh)

(7.8)において、KASは2・3行目で浪人と留年を経験している父の批判の発話をする。そして、6行目にKASは父が大学を卒業した年と自分が生まれた年を並べて発話した。これは、このシークエンス直前にMIAが「現在の自分と同じ年齢(24歳)の時に、母が私を生んだ」ことを述べたことに関連した話題である。6行目のKASの発話に対してMIAは8行目で、時間と

いう事実に焦点を当てて「(KAS が) 凄く早く生まれている」と発話した。そして、12 行目において KAS は笑いを含んで「卒業直後に子供を持った父がヤバイ」と家族を卑下する発話をする。KAS は笑いを含むことで、この発話を面白いこととして示している。さらにこの時 KAS が用いた文末表現は上昇イントネーションの否定疑問文で、KAS 自身が抱いた評価を ILO や MIA に同意を求めている様子が分かる。否定疑問文の場合、同意の第二成分が優先性の高い発話であるが、MIA は 14 行目において「お母さんが先に卒業したってことか」と返答する。ここで MIA は KAS の同意を求める発話に対して、同意も非同意も避け、KAS の母に焦点を移した事実確認の発話に留めている。また、Jefferson (1979) は現在の発話者の笑い声を含んだ発話は、会話参加者の笑いを引き出す機能があるとした。しかし 12 行目の KAS の発話に笑い声が含まれているにも関わらず、次の発話者である MIA の 13・14 行目では笑い声が含まれていない。これは Jefferson (1984) が論じたように、トラブルトーク(発話者自身の離婚、病気などの話)において発話者の発話に笑いが含まれていても、聞き手がそれに続いて笑う行為は相応しくないという観察と同様である。従って、12 行目の KAS のトラブルトークに笑いが含まれていても、MIA はその笑いに便乗することは避けたと言える。

次に KAS は 41 行目で再び「ヤベ:」と発話し、12 行目の「ヤバイ」を繰り返した家族卑下を行った。そして 42 行目で MIA は小声で「確かに」と早口で家族卑下に最小限の同意を示した。この反応は 7 章 1 節の「自己卑下—否定」の第二成分において、自己卑下が繰り返された場合は、それを否定するのではなく、一部を認めることに志向した発話が第二成分として好まれるという観察と同様である。そして、MIA は初めの発話を打ち消すように「全部が最近のことだね」と述べ、8 行目と同様に時間という事実や、出来事の最近性に焦点をずらす発話をしている。

次に KAS は 44 行目において、「卒業して次の日に子供養うとか無理」という一般論を述べ、MIA も 45 行目でその一般論に同意した。そして、46 行目において KAS は再び「ヤバイ」を繰り返して家族卑下を行った。この

時に「マジで思った」というように、ヤバイを用いた発話の3度目で初めて言い切りの断定を用いる。さらに、KASは12行目と同様に発話に笑いを含んだ言い切りの断定の発話でMIAの笑いを引き出そうとすると共に、一連の家族卑下を冗談化させて発話する。Sacks (1974)は、冗談の発話に対する適切な反応は笑いであると論じた。しかし、46行目のKASは12行目と同様にトラブルトークであるため、すぐに笑いを含んで反応することは避け、47行目で0.5秒の沈黙を緩衝として48行目でMIAも笑いを含みながら発話することで、KASの冗談に対して適切な反応を示した。しかし、48行目のMIAの発話は「それ自分の親じゃん」という事実であり、父がヤバイことについては直接触れていない。従って、1度目及び3度目の「ヤバイ」へのMIAの反応は「ヤバイ」に同意も非同意も表明しないことや、卑下に直接触れないことで回答を回避する発話デザインを用いたと言える。さらに、2度目の「ヤバイ」に対しては小声や早口の発話で弱く同意した後、それを打ち消すように焦点をずらした発話で卑下に触れないようにする様子が観察できた。ここから、今まで観察してきた自己卑下とは異なり、家族の卑下への第二成分として、同意も非同意も表明せずに事実を述べることに志向することが分かった。

7.5. 自己卑下の連鎖における逸脱ケース

自己卑下は評価における優先性の例外であることから、第一成分の自己卑下に対しては、第二成分として否定の発話が優先性の高い行為である。6章1~4節まではこの規則に従った現象を観察したが、5節においては、この規則に従っていない逸脱ケース(deviant case)を2例検討する。(7.9)では、ILOの自己卑下に対してKASが同意の第二成分を発話する。

(7.9) [ILO. KAS. MIA, 43:26-44:15、痩せないと]

01→ILO: やせないと.

02 MIA: あ hh[hhhhhh]

03→KAS: [そうだよ:.(笑い顔で)]

((41 行省略))

44 KAS : >でも<見たいわ 痩せたオッパ。
お兄さん

45 一回[くらい。

1 行目で ILO が「痩せない」と発話をしているが、この発話は自分が現在太っていることを含意していることから、自己卑下と言える。1 行目の第一成分に対する明確な第二成分は 3 行目の KAS の「そうだよ:」である。この発話は笑顔を伴っているものの、発話自体に笑い声は含まれず、平叙文として捉えられ、比較的強い同意であるととれる。自己卑下は評価における優先性の例外であることから、第一成分の自己卑下に対しては、第二成分として否定の発話が優先性の高い行為である。しかし、3 行目の KAS の発話は同意で、優先性の低い行為である。従って、これは逸脱ケース (deviant case) であると言える。では、何故 KAS は優先性の低い同意の発話を行ったのであろうか。これは、(7.9) のシーケンス以前の発話に関連していると考えられる。これ以前の発話の一部が以下である。

(7.10) [ILO-KAS-MIA, 39:42-39:54, 97kg]

- 01→KAS : hhh>でもひやくはちじゅうななあったら
02→ [モデルになった方がいいんじゃない?
03→ILO : [で: 高校生でろくじゅうなな(.)キロだったから:,
04 MIA : うん.[めっちゃ細いじゃん。
05→ILO : [()も:>ほんとにく骨しかなかった[よ。
06 MIA : [うん。
07→ILO : 今はさんじゅっキロもふ-
08 MIA : °hhhhh°
09 KAS : え きゅうじゅうなな?
10 ILO : うん.きゅうじゅうななぐらい。

(7.10)において、1行目でKASはILOの身長の高さへの言及と共に「モデルになった方が良い」という提案としての褒めを行った。次に3・5行目でILOが「187cmの身長で67kgであり、非常に細身であった」ことを発話し、MIAも4・6行目でILOの発話を受けて、同意の発話をしており、ILOとMIAの間で187cmの身長の人々の体重として67kgは痩せ形であるという価値観を共有したことが分かる。次に7行目でILOは「今は30kgも(太った)」という自己卑下の発話をしている。ここでの「も」は取り立て助詞の「も」であり、発話者であるILOの30kgに対する捉え方が含意されている。従って、ここでILOは30kgの体重の増加は異常なことであるとKASとMIAに示すと共に、現在の自分が太っていることを含意した発話を行っていることが分かる。また、Golato (2005)は、自己卑下の連鎖の後には結果として褒めの連鎖が起こりやすく、自己卑下は褒めを引き出す装置(fishing for compliments)であるとした。しかし(7.10)においては、1・2行目の褒めに対して、自賛を回避する手順を進めた結果として7行目で自己卑下が行われている。従って、褒めの後には自己卑下が続くことが観察され、褒めと自己卑下は互いを引き起こし合う密な関係を持っていることが分かる。

そして(7.10)から、(7.9)以前に会話参与者間ですでに現在のILOが太っており、以前は痩せ形であったということは共通認識になっていたことが分かる。ここから、(7.9)においてKASが3行目で同意を行ったのは、ILOが痩せていた頃から30kg太ったことを具体的な数字とともに示したことで、現在のILOが太っていることが紛れもない事実であるため、否定する必要が無い(できない)と判断されたためであると考えられる。さらに、KAS自身も現在のILOが太っていることを容認している様子が44行目の「痩せたオッパ」という発話からも分かる。

次の(7.11)も、HONの自己卑下の第一成分に対してMIAが同意の第二成分を発話する例である。

(7.11) [HON-MIA, 2:04:40-05:06, 邪魔になる]

01 HON: 実はこの年になって:女の子だったら[:

- 02 MIA : [うん.
 03 HON : 絶対なんかやるんだけど : =
 04 MIA : =>そうそうそうそうそう.<=
 05→HON : =邪魔になるからどけ(h)って(h)言(h)わ(h)れ(h)る(h)か(h)ら(h).
 06→MIA : (°hhhhh°)¥普段から料理しない[からだよ : ¥
 07 HON : [(hhhh h h)

(7.11)において、HONは1・2行目で自分以外の同世代の女の子は、お盆などの親戚が多く集まる日には料理を手伝うものだという前置きをした。そして、4行目でMIAはHONの1・2行目の発話、つまり同世代の女の子がすべきことについて強く同意する。次に5行目において、HONは笑いを伴って「邪魔になるから退けと言われるから料理を手伝ったことがない」と発話し、同世代の女の子にとって当たり前の役割を果たしたことがないという意味の自己卑下を行う。それを受けたMIAは第二成分として「普段から料理しないからだよ」と発話し、HONの自己卑下を上方修正(upgrade)するように同意する。これは(7.9)と同様に逸脱ケース(deviant case)である。これも、何故MIAは優先性の低い同意の発話を行ったのであろうか。これは、(7.11)のシークエンス以前の発話に関連していると考えられる。これ以前の発話の一部が以下である。

(7.12) [HON-MIA, 32:53-33:08, 料理しない]

((豚カツの作り方について話していたが、MIAが豚カツにパン粉を使うかどうか分からず、その発話を受けてHONも従来パン粉は必要と考えていたが、自信が無くなった。))

- 01 MIA : 分かんないんだよ料 : 理 : .
 02 HON : >てか<分かんない. 私も料理全然しないから : .
 03 MIA : ひとり暮らしじゃん.
 04 (3.0)
 05 MIA : [あ(.)ま ルームシェア
 06 HON : [あ : : : : ま-だ-だ- だけど : (.)しない. 料理しないから : (0.3)

- 07 もう おこ- お米さえないよ今.
 08 MIA : は? [(hhh)死ぬ, 死ぬよ]
 09 HON : [(hhh hhh)]

(7.12)において、直前のシーケンスでMIAが日本と韓国の豚カツが少し異なっていると述べたことから、豚カツの作り方について話しが及んだ。しかし、MIAが豚カツにパン粉を使用するのか自信がなく、従来パン粉を用いると知っていたHONも自信がなくなり、(7.12)の1行目の発話に至った。そして、2行目においてHONが「私も全然料理しないから」と言い、自分自身を料理ができない者と位置付ける。さらに、6行目において「料理しない」と繰り返し、7行目で「お米さえない」と付け加え、料理をしないことをさらに強調している。

そして、(7.11)の6行目においてMIAが優先性の低い同意の発話をするに至ったのは、これ以前の会話である(7.12)のように、MIAとHONの間ではHONが料理をしないことが共通認識になったためであると言える。さらに、(7.12)の後にもHONが普段の食事は出来合いの物やフルーツで済ませると発話していることから、HONが料理をしないことが紛れもない事実であるため、否定する必要が無い(できない)と判断されたためであると考えられる。

7.6. 自己卑下の連鎖についての考察

7章において自己卑下の第一成分及び第二成分について観察してきたが、6節では観察されたことを踏まえて考察を展開していく。まず第一成分についての特徴として、自己卑下の発話は何の脈略もなしに発生するものではなく、前の文脈を受けた行為である場合が多いことが分かった。一方、6章では褒めが第一成分の場合(6.3)のように、前の文脈なしに突然始めることがあることが示された。7章で観察した筆者が収集した自己卑下が含まれる抜粋(7.7及び7.12を除く)では全て、自己卑下はなんらかの引き金や前の文脈から影響を受けた結果生じたものであった。

また、褒めの連鎖には再褒めや上方修正(upgrade)がしばしば見られるように、自己卑下の連鎖にも卑下の再展開や上方修正が観察された。同時に、自己卑下の再展開にはしばしば普遍的な事実が加えられ、会話参加者に卑下を認めさせることに志向することも観察された。この時、第二成分発話者は1度目の自己卑下では優先性の高い否定の回答を履行することに専念するが、自己卑下が再展開された際には自己卑下の第一成分を一部認める発話をする人が多いことが観察された。これは、自己卑下に普遍的な事実を追加したことに加え、自己卑下の対象は他でもなく第一成分発話者に帰属したものであり、その対象を最もよく知る者が第一成分発話者であることと関連しているからであると考えられる。

次に、自己卑下は連鎖を終える指標になり得ることが分かった。(7.5)のように、自己卑下が一連の語りの理解表明として発話された際には、そこで語りは終了点を迎え、次の行為へ移行可能となる。

また、自己卑下の第一成分では笑いを含んで笑い話しや楽しい話しとして会話参加者に伝えることに志向する様子も観察できた。この時の第二成分発話者は、第一成分発話者の意図を理解したことを表明するために笑いを含んで返答することが多いようである。

次に自己卑下の第二成分について考察する。まず、否定の第二成分の場合、断定的な否定は避けて曖昧さの残る発話デザインを採ることが多い。これは先述の通り、自己卑下の対象が第一成分発話者に帰属したものであるためだと考えられる。自己卑下の連鎖では、第一成分発話者がその対象を最もよく知る者であり、第二成分発話者が対象についての知識に劣っている者であるというカテゴリー化に、会話参加者自身が強く志向しているためだと考えられる。

次に、会話参加者は自己卑下の発話を受けて同様の体験を語ることを開始することが観察された。これは、上記の通り第二成分発話者は自己卑下の対象についての知識に劣っている者というカテゴリーに属していることから、断定的な否定の発話が控えられることに関連した行為であると考えられる。断定的な否定を避け、曖昧さの残る発話しかできない第二成分発

話者は第一成分発話者の自己卑下と同様の経験があることを示し、第一成分発話者に卑下する程のことではないことを示し、暗に自己卑下の否定を継続していると言える。

さらに、第二成分として自己卑下の発話内で用いられた表現を繰り返すことで、自己卑下に同調する様子も観察された。Kim (2014)の観察によると繰り返しの手法を用いた同調は、互いを同じ水準に置き、互いの強い関係性を保つことに重要な役割があるという。また、本研究で扱った3例全ての同調の発話は日本人母語話者によるもので、Kim (2014)の日本語母語話者は英語もしくは韓国語母語話者より自己卑下に同調することが多いとの観察と一致した。また、Hayano (2011)は英語の会話においては評価の第一成分(e. g., good)に対しては第二成分として上方修正(upgrade)した表現(e. g., great)を用いた反応を示さなければ同意と見なされない一方で、日本語の会話においては、第二成分として第一成分と同レベルの表現(e. g., 「いいね」という評価に対して「いいね」)での反応で同意と見なされるとした。従って、日本語には評価の第一成分を繰り返す傾向があり、これが自己卑下に対して繰り返して同調するという傾向に繋がったと考えられる。さらに、同調することは上述の「同様の体験を語ること」と同様に、第二成分発話者は第一成分発話者と同じ感覚を持っていることを示していると言える。従って、第一成分発話者に卑下する程のことではないことを示し暗に自己卑下の否定をしていると言える。ここから、本論文で検討してきた第二成分発話者の発話行為(自賛の回避、言及点の変更、下方修正、同様の体験を語ること、同調)は全て、自己卑下の第一成分に対して否定することに志向した行為であると言える。

次に、自己卑下の対象が家族である場合の第二成分の特徴として、卑下の対象に同意や非同意などの自身の評価を表明せず、卑下に直接触れないことで回答を回避する発話デザインが用いられたことが挙げられる。従って、第一成分発話者は卑下に対する適切な発話が一向に得られず、何度も繰り返す様子が観察された。さらに、文末表現として疑問形から断定へ言い切りの姿勢を示すことで、より強い主張へと徐々に変化させる第一成分

の発話デザインも見られた。

最後に、逸脱ケース (deviant case) について考察する。自己卑下の第一成分に対して優先性の高い第二成分は自己卑下を否定することであるが、収集データ内では同意の第二成分も観察された。これは、自己卑下の第一成分が発話されるより前のシーケンスにおいて、自己卑下が事実になりうる共通認識が確立されている際に起こる現象である。何故なら、事実の共通認識は、いわば自己卑下が事実であることを示す証拠であり、第二成分発話者はこの証拠に基づいて自己卑下を否定する必要が無い(できない)と判断した末の結果であると言える。

第8章 まとめ

6章及び7章で、筆者の所有データを元に褒めの連鎖と自己卑下の連鎖をそれぞれ検討した。筆者が褒めや自己卑下を第一成分及び第二成分の連鎖という一括りにして検討した理由や、褒めと自己卑下を同時に検討した理由が以下の(8.1)で顕著に観察できる。(8.1)は、7章5節で検討した例及びそれに続く連鎖である。

(8.1) [ILO. KAS. MIA, 43:25-44:16、痩せないと]

((ILO が来日したばかりのときは、痩せてイケメンだったが、日本語学校に通っていたため、日本人の友達がおらず、モテた経験も無いという話の流れがあった。))

01→ILO: やせないと.

02 MIA: あ hh[hhhhhh

03→KAS: [そうだよ:.

04→ILO: でも大学終わったし。な。

05 (2.0)

06→MIA: いや:でも[:

07→KAS: [>でもくこれからの[人生が.

08→MIA: [これからだよ.

09 ILO: う:ん.これから さんじゅう代が

- 10 KAS : そうだよ[さんじゅう-
- 11→MIA : [え 今なんさ:い?
- 12 (1.2)
- 13 ILO : にじゅうはちん
- 14 (0.6)
- 15→MIA : [まだまだ平気だよ.
- 16 ILO : [日本だとにじゅうはち.<[向こうだとにじゅうきゅう.
- 17 KAS : [さんじゅうまでに痩せよう.
- 18 MIA : うん. え 今年にじゅうきゅう?
- 19 ILO : 向こうだと.
- 20 (0.5)
- 21 MIA : あ あ: 向こうだと[か.
- 22 ILO : [うん.
- 23 KAS : ここではにじゅうはち[か.
- 24 ILO : [うん.
- 25 KAS : あれ オッパ誕生日いつだっけ.
お兄さん
- 26 ILO : ろく月.
- 27 KAS : ↑お: . . え じゃあ今にじゅうなな?
- 28 MIA : うん.
- 29 ILO : うん.
- 30→KAS : お: . . : 一番 一番[いいときじゃん.
- 31→MIA : [一番いいときじゃん.
- 32→ILO : 一番いい [一番デブ- デブのときじゃん.
- 33 MIA : [hhhhhh
- 34→KAS : にじゅうなな にじゅうはち だよ 一番いいのは: .
- 35→MIA : 一番油がの(h)って(h)るじゃ(h)ん. [hhhh
- 36 KAS : [そういう いい[じゃないんだけど: .
- 37→ILO : [¥油のりすぎて

- 38→ [のりすぎるでしょこれ、もう大トロしかないよ。¥
- 39 MIA : [hhhhhhh
- 40 あ[hhhhhhh
- 41 KAS : [hhhhhhh おいしくない[大トロだ(これは.)
- 42 MIA : [()hh .h
- 43 (1.3)
- 44 KAS : >°でも°く見たいわ 痩せたオッパ、
お兄さん
- 45 一回[くらい、

まず、7章5節で検討したように1行目においてILOが「痩せない」と自己卑下を開始する。それに続く3行目のKASが「そうだよ」と自己卑下における第二成分として優先性の低い発話で返答する。この3行目の発話についても逸脱ケース(deviant case)として検討した。

続いて、4行目においてILOがさらに「大学終わったしな」と体型の自己卑下から年齢に言及した自己卑下を開始する。そして2秒の沈黙の後に、6行目でMIAが「いや：でも：」と発話する。この発話はILOの4行目の自己卑下を否定するために発話されたものであるが、否定の対象が不明瞭であり、曖昧な返答に抑えられている。そして、7行目でKASが続けて「これからの人生が」と発話し、ILOの「大学という節目の終了」に対する「これからの人生」という焦点で否定の第二成分を発話する。そして、11行目でMIAは「今なんさい?」とILOに質問する。この行為は岩田(2014)の就労カウンセリングで観察された、利用者の自己卑下に対して支援者は遅延も言いよどみもなくすぐに質問をする行為と同様であり、優先性の高い非同意の志向した行為である。MIAもここで質問をすることにより、4行目のILOが自己卑下の発話を行うこととなった根拠を探り出し、客観的に見て妥当ではないことを示そうとしたためであると考えられる。MIAがILOに質問した年齢は、人間が誰も持つアイデンティティであり、自己卑下の第一成分発話者以外でも推し測ったり、経験として判断可能な事柄につい

てである。従って、MIA が ILO の自己卑下に根拠を以って強く否定することを目的とした発話であると考えられる。実際に、ILO が「28 歳」であることを確認した MIA は 15 行目において「まだまだ平気だよ」と自己卑下を否定する発話をしている。

そして、11 行目を始点として 29 行目まで ILO の年齢についての確認が行われる。そして、30 行目において KAS が年齢に焦点を当てて「一番 一番いいときじゃん」と ILO に対する褒めの第一成分を発話する。これに続いて MIA も 31 行目で「一番いいときじゃん」と KAS の言葉を繰り返す形で褒めに同調する。これは、Golato (2005) が自己卑下の連鎖の後には結果として褒めの連鎖が起こりやすく、自己卑下は褒めを引き出す装置(fishing for compliments)であるとしたことと同様の観察ができる。30・31 行目の褒めに対して ILO は 32 行目で「一番デブー デブのときじゃん」と 1 行目と同様に体型に言及点を変更して褒めを否定する。このとき、ILO 自身が 1 行目の自己卑下と同様の体型へ言及点を変更したことから、32 行目は褒めへの否定の第二成分と共に、自己卑下の第一成分として捉えることもできる。

そして、KAS は 30 行目の褒めが否定されたことから、「27、28 だよ一番いいのは」と、具体性を持たせて再褒めを行う。続いて MIA も 35 行目において「一番油がのってるじゃん」と笑いを含めて再褒めをする。しかし、「油がのっている」は「物事の勢いついて来たこと」という意味の他に、文字通り「身体に贅肉が付く」という意味とも取れる。従って、35 行目の MIA の発話は再褒めと同時にからかいの発話とも取れる。

この MIA の発話を KAS と ILO の両者共、後者の「身体に贅肉が付く」という意味で解釈している。36 行目で KAS は「そういういいじゃないんだけど:」と、からかいを否定し、37・38 行目で ILO は「油のりすぎて のりすぎるでしょこれ」とからかいに乗って自己卑下をする。さらに、ILO は 38 行目で「もう大トロしかないよ」と自己卑下を上方修正(upgrade)する。このとき ILO は笑い声は含まないものの、口元は笑顔で囁れ声の発話であるため、MIA も KAS も笑いでも反応する。そして最後に KAS が 41 行目で「おいしくない大トロだ(これは)」と発話することで、会話参加者全員が 35

行目の MIA のからかいの発話に乗ったことが分かる。

(8.1)のように、褒めと自己卑下の連鎖は非常に複雑に互いを共起し合っていることが分かる。今回、褒めと自己卑下の第一成分と第二成分を連鎖として分析した結果、褒めと自己卑下は連鎖として現れやすいことが分かった。評価という同一の行為ではあるものの、褒めと卑下は対極に位置しているように思われたが、実際は互いに密接な関係を持っており、表裏一体の関係であることが分かった。

次に日本人と韓国人の褒めと自己卑下の発話について検討する。まず、褒めについてであるが、日本人と韓国人の褒めを比較するに当たり、褒めの第一成分及び第二成分の発話回数がそれぞれの国籍で等しく発話される必要がある。しかし、5章で検討した全ての褒めの連鎖において第一成分が日本語母語話者で第二成分が韓国語母語話者によるものであり回数の不均衡が見られた。従って、母語の違いによる第一成分と第二成分のそれぞれの違いの比較は難しいと言える²。

本研究では褒めの話題(対象)について日本語母語話者と韓国語母語話者に違いが見られた。褒めの対象について、Herbert (1989)は褒めの対象は、ある社会がどのような対象物に肯定的な価値を置いているかを反映していると述べた。さらに金(2012)は、日本語における褒めにおいて、「外見」への褒めの出現頻度が低いとし、それはそもそも「外見」が話題として取り上げられるのが韓国語に比べて少ないことが要因であると考えられると述べた。すなわち、金(2012)によれば日本語では他の対象に比べ「外見」を話題にし、褒めることは相手に与える負担が大きく、できるだけ触れないように配慮することが日本語母語話者にとっても一種のポライトネス・ストラテジーになっているということだ。これに対して韓国語の場合「外見」に関心を表す話題が多く、またそれを積極的に褒めるというポライトネス・ストラテジーを優先していると解釈すると論じた。本研究においても日本語母語話者同士で外見について褒める様子は観察されなかった。しかし、6章で取り上げた褒めの連鎖において2例、韓国語母語話者の外見に関する褒めが行われている。これは、データ中に韓国語母語話者が含まれ

るためなのか、日本語母語話者に韓国留学経験があるためなのか定かではないが、今後の研究課題として、会話参加者を様々な環境において、褒めの対象に変化が見られるのか検討するのも興味深い。

次に自己卑下の連鎖は、自己卑下の第一成分及び第二成分の国籍別の不均衡はそれ程見られなかったが、自己卑下に対する第二成分について日本語母語話者の特徴が1点観察された。その観察とは、Kim (2014)が日本語母語話者同士の会話における自己卑下の第二成分として、第一成分の発話をそのまま繰り返して同調する傾向が強いとしたが、本研究でもそれが同様に観察された点である。本研究における自己卑下の第二成分として同調の発話が見られた例は3点で、3点共に自己卑下の第一成分が日本語母語話者であり、第一成分の発話を繰り返して同調する第二成分も日本語母語話者によるものであった。従って、Kim (2014)が日本語の自己卑下における繰り返しによる同調は、互いを同じ水準に置き、互いの強い関係性を保つことに重要な役割を持つと論じたように、本研究においても日本語母語話者による自己卑下の連鎖は繰り返しによる同調は会話参加者間の関係性の強化を図る役割を果たしていたのかもしれない。

最後に、第二言語話者を含む会話分析の際に気を付けるべき点としてシェグロフはWong & Olsner (2000)のインタビューにおいて以下のように述べた。

There's nothing wrong with it as long as you are clear about it so you don't insist it into the data, so that you don't insist that the participants be as preoccupied with native/nonnative speakers as you are...unless they are. If they are, of course, you need to recognize that and trace out the consequences and the way it figures in the way they conduct the interaction. But that's because they're preoccupied with it or oriented to it, not because you are. (Wong & Olsner. 2000. p. 195).

シェグロフが述べたように、第二言語話者を含む会話分析において気を付

けるべきことは、観察者は第二言語話者を含む会話であることを念頭において観察を始めてはいけないということである。従って、観察者が第二言語話者を含むデータであると認識するときは、データ内で会話参与者自身が第二言語話者を含む会話であることに志向したときであり、分析者はある会話参与者が「第二言語話者だから」という先入観は持ち合わせてはならないということである。そして、会話参与者が第二言語話者を含む会話であることに志向した結果初めて、彼らがどのようにそれを取り扱ったか検証できるとした。

本研究では褒め的话题(対象)について第二言語話者を含む会話であることに志向した様子が観察された。それは(6.2)に見られるように第一言語話者が第二言語話者に対して言語能力を話題にして褒めることである。母語話者同士が学習中の第二言語を褒めることはあっても、母語である第一言語を褒めることはほとんどないであろう。しかし、第二言語話者を含むことで必然的に母語である者とそうでない者というアイデンティティが発生し、結果として母語話者がそのアイデンティティに志向して言語能力を褒める行為が発生したと思われる。

また、今後の課題として前述の通り日本語母語話者と韓国語母語話者を様々な会話環境に置いて、データを収集してそれぞれに違いが出るのか検討したい。また、特定の日本語学習者を初級から上級まで追跡し、褒めや自己卑下の発話行為の変化を追うのも、日本語教育へ有益な研究になるのではないかと考えられる。

注 1 Kim (2014)は、自己懷疑は自分の立場や考えを疑問視するという意味で自己卑下に含めている。しかし、本研究ではこのような例を自己卑下として取り扱わない。

注 2 本研究で用いたデータは会話参与者に「褒めや自己卑下を発話すること」などと指示を出す実験的なものではなく、自然発生的発話データに限定したため、各国籍で等しく褒めや自己卑下の発話を収集することが難しかった。

参考文献

- Atkinson, J. M., & Heritage, J. (1984). Preference organization. In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of social action: Studies in conversation analysis* (pp. 53-56).
Cambridge: Cambridge University Press.
- Garfinkel, H. (1967). *Studies in ethnomethodology*. Cambridge: Polity Press.
- Goffman, E. (1964). The neglected situation. *American Anthropologist*, 6 (2), 133-136.
- Goffman, E. (1967). *Interaction ritual: Essay on face-to-face behavior*. New York: Doubleday Anchor.
- Goffman, E. (1971). *Relations in public*. New York: Basic Books.
- Golato, A. (2005). *Compliments and compliment responses: Grammatical structure and sequential organization* (Vol.5). Philadelphia: John Benjamins.
- Goodwin, C., & Goodwin, M. H. (1992). Assessments and the construction of context. In A. Duranti & C. Goodwin (Eds.), *Rethinking context: Language as an interactive phenomenon* (pp. 151-189). Cambridge: Cambridge University Press.
- Goodwin, C., & Heritage, J. (1990). Conversation analysis. *Annual Review of Anthropology*, 19, 283-307.
- 初鹿野阿れ・岩田夏穂 (2008). 選ばれていない参加者が発話するとき——もう一人の参加者について言及すること—— 社会言語学, 10, 121-134.
- Hayano, K. (2011). Giving support to the claim of epistemic primacy: *yo*-marked assessments in Japanese. In T. Stivers, L. Mondada, & J. Steensig (Eds.), *The morality of knowledge in conversation* (pp. 58-81). Cambridge: Cambridge University Press.
- Herbert, R. K. (1989). The ethnography of English compliments and compliment responses: A contrastive sketch. In W. Oleksy (Ed.), *Contrastive*

- pragmatics* (pp. 3-35). Amsterdam: John Benjamins.
- Heritage, J. (1984). *Garfinkel and ethnomethodology*. Cambridge: Polity Press.
- Heritage, J. (1988). Explanations as accounts: A conversation analytic perspective. In C. Antaki (Ed.), *Analysing everyday explanation: A casebook of methods* (pp. 127-144). London: Sage.
- Heritage, J. (1989). Current developments in conversational analysis. In D. Roger & P. Bull (Eds.), *Conversation: An interdisciplinary perspective* (pp. 21-47). Clevedon, Avon: Multilingual Matters.
- Heritage, J. (1995). Conversation analysis: Methodological aspects. In U. M. Quasthoff (Ed.), *Aspects of oral communication* (pp. 391-414). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Hopper, R. (1988). Speech, for instance: The exemplar in studies of conversation. *Journal of Language and Social Psychology*, 7, 47-63.
- 細田由利 (2014). はじめに 未発表原稿
- 飯尾牧子 (2006). 短大生の話し言葉にみる談話標識「なんか」の一考察 東洋女子短期大学紀要, 38, 66-77.
- 岩田夏穂 (2014). 就労支援のカウンセリングにおける「自己卑下」の展開 社会言語科学会第34回大会発表論文集, 150-153.
- Jefferson, G. (1979). A technique for inviting laughter and its subsequent acceptance/declination. In G. Psathas (Ed.), *Everyday language: Studies in ethnomethodology* (pp. 79-96). New York: Irvington.
- Jefferson, G. (1984). On stepwise transition from talk about a trouble to inappropriately next-positioned matters. In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of social action: Studies in conversation analysis* (pp. 191-222). Cambridge: Cambridge University Press.
- 金庚芬 (2012). 日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究 東京 : ひつじ書房
- Kim, M-H. (2014). Why self-deprecating? Achieving ‘oneness’ in conversation. *Journal of Pragmatic*, 69, 82-98.

- Liddicoat, A. J. (2011). *An introduction to conversation analysis*. New York: Continuum.
- Pomerantz, A. (1978). Compliment responses: Notes on the co-operation of multiple constraints. In J. Schenkein. (Ed.), *Studies in the organization of conversational interaction* (pp. 79–112). New York: Academic Press.
- Pomerantz, A. (1984). Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes. In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structure of social action: Studies in conversation analysis* (pp. 57–101). Cambridge: Cambridge University Press.
- Pomerantz, A., & Fehr, B. J. (1997). Conversation analysis: An approach to the study of social action as sense making practices. In T. A. van Dijk (Ed.), *Discourse as social interaction* (pp. 64–91). London: Sage.
- Psathas, G. (1990). Introduction: Methodological issues and recent developments in the study of naturally occurring interaction. In G. Psathas (Ed.), *Interaction competence* (pp. 1–30). Washington, D.C.: International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis and University Press of America.
- Psathas, G. (1995). *Conversation analysis: The study of talk in interaction*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Sacks, H. (1974). An analysis of the course of a joke's telling in conversation. In R. Bauman & J. F. Sherzer (Eds.), *Explorations in the ethnography of speaking* (pp. 337–353). Cambridge: Cambridge University Press.
- Sacks, H. (1987). On the preference for agreement and contiguity in sequences in conversation. In G. Button & J. R. E. Lee (Eds.), *Talk and social organization* (pp. 54–69). Clevedon: Multilingual Matters.
- Schegloff, E. A. (1968). Sequencing in conversational openings. *American Anthropology*, 70 (6), 1075–1095.
- Schegloff, E. A. (1992). In another context. In A. Duranti & C. Goodwin (Eds.),

- Rethinking context: Language as an interactive phenomenon* (pp. 191-228). Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, E. A. (1996). Confirming allusions: Towards an empirical account of action. *American Journal of Sociology*, 104, 161-216.
- Schegloff, E. A. (2007). *Sequence organization in interaction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, E. A., & Sacks, H. (1973). Opening up closings. *Semiotica*, 8, 289-327.
- Schnurr, S., & Chan, A. (2011). When laughter is not enough: Responding to teasing and self-denigration humour at work. *Journal of Pragmatics*, 43, 20-35.
- Stivers, T., & Hayashi, M. (2010). Transformative answers: On way to resist a question's constraints. *Language in Society*, 39, 1-25.
- Stivers, T., & Robinson, J. (2006). A preference for progressivity in interaction. *Language in Society*, 35, 367-392.
- 高木智世 (2014). 連鎖の組織と優先組織 未発表原稿
- Ten Have, P. (2007). *Doing conversation analysis: A Practical Guide*. London: Sage.
- Wong, J. & Olsher, D. (2000). Reflections on conversation analysis and nonnative speaker talk: An interview with Emanuel A. Schegloff. *Applied Linguistics*, 11 (1), 111-128.
- 山口勸・Tafarodi, R. (2004). 自尊心およびその自己呈示に関する日本とカナダとの国際比較 *Annual Report of the Murata Science Foundation 2004 No. 18* 成果報告書, 110-116.
- 米川明彦 (1996). 現代若者ことば考 東京: 丸善ライブラリー

添付資料 1

録音・録画データの表記法

[]	発話の重なり
=	切れ目のない接続
<	次の発話の急速な始まり
(数字)	数字の秒間の沈黙
(.)	わずかな沈黙
:	音の伸び
: :	さらに長い音の伸び
-	音の切れ
.	(語尾の)下降イントネーション
,	少し下がって弾みのついた音調
?	(語尾の)上昇イントネーション
—	音の強調
↑	音調の急な上昇
↓	音調の急な下降
斜体	大きな音での発話
° °	小さな音での発話
< >	ゆくりした発話
> <	速い発話
hh	吐く息
.hh	吸う息
(hh)	笑い声
(HH)	大きな声での笑い声
¥ ¥	嘎れ声
()	聞き取り困難な発話
(())	筆者のコメント

添付資料 2

研究への参加同意書(サンプル)

研究への参加同意書

研究課題：神奈川大学大学院 外国語学研究科 欧米言語文化専攻博士前期課程 修士論文

私は今回録画及び録音されたデータが学術研究、学術発表のみに使用されることを理解した上でこの研究への参加に同意致します。

ご署名： _____

日付： _____

ご連絡先： _____

電話番号又はメールアドレス： _____

データ使用に関する特記事項： _____
